

北柳1遺跡

第2次発掘調査報告書

2000

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

きた やなぎ
北 柳 1 遺 跡

第2次発掘調査報告書

平成12年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、北柳1遺跡の調査結果をまとめたものです。

北柳1遺跡は、山形市の北部、天童市に近接する大字青柳にあります。立谷川と高瀬川の複合扇状地にあたるこの地は、田畠の広がる農業地帯でしたが、主要地方道山形天童線の開通、山形県立保健医療短大および県立中央病院の建設にともない大きくその様相を変えつつあります。

この度、山形県立中央病院改築整備事業にともない、病院敷地内にかかる北柳1遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代終末期の竪穴住居跡11棟、竪穴状造構3棟、大型の土壙2基、古墳時代の竪穴住居跡1棟が確認されました。縄文時代終末期の竪穴住居跡は、県内はもちろん東北でも検出例が少なく注目されます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成12年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は、山形県立中央病院改築整備事業にかかる「北柳1遺跡」の第2次発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県健康福祉部病院局の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺　　跡　名　　北柳1遺跡　　遺跡番号　平成7年度登録
所　　在　地　　山形県山形市大字青柳字北柳
調　　査　主　体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター
受　　託　期　間　　平成11年8月1日～平成12年3月31日
現　　地　調　査　　平成11年9月6日～平成11年10月27日
調　　査　担　当　者　　調査第一課長　野尻　侃
　　　　　　　　　　調査第三課長　佐藤　正俊
　　　　　　　　　　調査研究員　森谷　昌央（調査主任）
　　　　　　　　　　調　　査　員　　福村　圭一

- 4 発掘調査および本書を作成するにあたり、山形県健康福祉部病院局、山形県土木部營繕課、山形県教育庁文化財課、山形市教育委員会、東南村山教育事務所等関係機関に協力をいただいた。
- 5 本書の作成・執筆は、森谷昌央、佐藤正俊、福村圭一が担当した。編集は犬飼透・衣袋忠雄・須賀井新人が担当し、全体については、佐藤正俊が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。
　　遺構写真実測　　株式会社新技術コンサルタント
　　理化学資料分析　　株式会社古環境研究所
- 7 出土遺物、調査記録類等は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次のとおりである。

S T …堅穴住居跡	S K …土壤	S X …性格不明遺構
E P …遺構内ピット	E K …遺構内土壤	E L …遺構内炉跡
R P …登録土器・土製品	R Q …登録石器・石製品	
P ……土器	S ……石	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆基準は下記のとおりである。

- (1) 遺構概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N-20°-Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/80の縮尺で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中の●は土器・土製品の出土地点を表す。△は礫・石器・石製品の出土地点を表すが、大部分は礫であり、石器・石製品については全点ドット図中に表記している。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/3、1/4で採録し、各々スケールを付した。
- (5) 遺物ドット図中の遺物実測図・拓影図は任意の縮尺とした。
- (6) 遺物図版については、単体のものを1/3・1/4で、集合のものを1/2の縮尺で採録した。
- (7) 遺物番号は、遺物実測図・ドット図・遺物図版とも共通した番号を使用している。
- (8) 遺物実測図中の番号右側の()について、S T **は出土した遺構を示し、出土遺構が判明しているが具体的地点の不明なものは遺構番号とグリッド番号を付した。また出土遺構の不明なものについてはグリッドを記載している。出土地点の右側には掲載されている遺物ドット図の番号を「図**」と表記した。
- (9) 遺構覆土の色調の記載については、1987年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に従った。

目 次

I 調査の経緯.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 調査の経過.....	1
II 遺跡の立地と環境.....	2
1 地理的環境.....	2
2 歴史的環境.....	2
III 遺跡の概要.....	4
1 遺跡の層序.....	4
2 遺構・遺物の分布.....	4
IV 検出された遺構.....	6
V 出土した遺物.....	19
1 土器・土製品.....	19
2 石器・石製品.....	38
VI まとめ.....	41
報告書抄録.....	42

挿 図

第1図	遺跡概要図	2	第13図	14・15号竪穴住居跡	17
第2図	遺跡位置図	3	第14図	古墳時代竪穴住居	17
第3図	基本層序	5	第15図	14・15号竪穴住居跡	
第4図	遺構配置図	5		遺物 ドット図	17
第5図	1・2・3・6号竪穴住居跡	7	第16図	土器実測図(1)浅鉢	20
第6図	1・2・3・6号住居跡		第17図	土器実測図(2)浅鉢	21
	遺物 ドット図	8	第18図	土器実測図(3)浅鉢・鉢形	24
第7図	4・5・8号竪穴住居跡		第19図	土器実測図(4)鉢形・壺形	26
	13・91号土壤	10	第20図	土器実測図(5)壺形	28
第8図	4・5・8号竪穴住居跡		第21図	土器実測図(6)深鉢	32
	13・91号土壤		第22図	土器実測図(7)深鉢	33
	遺物 ドット図	11	第23図	土器実測図(8)深鉢	34
第9図	9・10・11号竪穴状遺構		第24図	土器実測図(9)深鉢	35
	12号竪穴住居跡	13	第25図	土器実測図(10)深鉢	36
第10図	9・10・11号竪穴状遺構		第26図	土器実測図(11)深鉢	
	12号竪穴住居跡			弥生土器・土師器	37
	遺物 ドット図	14	第27図	石器・石製品実測図(1)	39
第11図	7号竪穴住居跡	16	第28図	石器・石製品実測図(2)	40
第12図	7号竪穴住居跡遺物 ドット図	16			

図 版

図版 1	遺跡近景・竪穴住居群		図版 8	出土遺物 土器 9・10	
図版 2	遺跡全景・竪穴住居跡完掘状況		図版 9	出土遺物 土器 11・12	
図版 3	出土遺物		図版 10	出土遺物 石器・石製品 1・2・3	
図版 4	出土遺物 土器 1・2				
図版 5	出土遺物 土器 3・4				
図版 6	出土遺物 土器 5・6				
図版 7	出土遺物 土器 7・8				

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

今回の北柳1遺跡の発掘は、県立中央病院の改築整備事業に伴うものである。

山形県教育委員会は、この「県立中央病院改築整備事業」と隣接する「健康の森整備事業」の両事業の実施に伴い、平成7年5月と同年12月の2度にわたって予定地内の遺跡の分布調査を行った。これにより当該地区が縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代の複合遺跡であることが確認され、東に位置する遺跡を北柳1遺跡、西に位置する遺跡を北柳2遺跡と命名した（平成7年度登録）。この調査結果に基づき財団法人山形県埋蔵文化財センターが、「健康の森整備事業」にともなう北柳1遺跡の8,000m²と北柳2遺跡の500m²の合計8,500m²について平成8年度に発掘調査を行った。今回も遺跡範囲のうち前回の調査区の北側にあたる「県立中央病院改築整備事業」にかかる1,500m²を対象とし、同センターが山形県健康福祉部病院局の委託を受けて発掘調査を行い、記録保存を行うことになったものである。

2 調査の経過

発掘調査は、1999年9月6日から10月27日までの実質28日間で実施した。調査面積は遺跡推定面積12,300m²のうち、「県立中央病院改築整備事業」にかかる面積として1,500m²である。

発掘調査対象面積については、当該事業の工事の進行により、旧田面からおよそ2m碎石盛土がなされていた。このため調査に先立つ9月1日から重機を導入し、碎石盛土の撤去作業を開始した。碎石盛土の撤去終了後、さらに重機を使用して旧表土の除去作業を実施した。その後9月16日に発掘機材の搬入と現地事務所の開設を行い、調査区を設定した。9月18日には関係機関と現場事務所において鍵入れ式を行い、工事の安全を祈願している。

調査は、表土除去終了後、面整理を行い、遺構および遺物の検出を行った。暗褐色粘土層が堆積しているため遺構検出が困難で、その後5cmほど表面を掘り下げ、土質の変化を追いかながら再び遺構検出を行った。続いて遺構精査を行い、記録用の畦を残しながら掘り下げた。出土した遺物は登録した後、出土地点・レベルの記録を行い取り上げた。その後写真撮影、断面図・平面図の作成などの記録作業にあたった。

10月24日には、関係者による現地説明会を行い、10月26日には遺構の空中写真測量を実施し、10月27日現場事務所の撤収を行って現場調査を終了した。

調査区内のグリッドの設定については、1次調査の調査区が「健康の森整備事業」に伴って碎石盛土され、グリッドの復元が不可能であったことから、2次調査では改めて任意のグリッドを設定した。グリッド設定にあたっては旧水田の畦畔が復元できたことから、これを基準として4m四方に区画し、西から東へA～Zの大文字のアルファベットを、北から南へa～gの小文字のアルファベットを使用した。グリッドの表記は北西角をとって「A-a」等と記述することとする（第1図）。

なお、グリッドの南北軸はN-20°-Eを測り、前回の調査時のグリッドの南北軸から1度東へずれることとなった。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

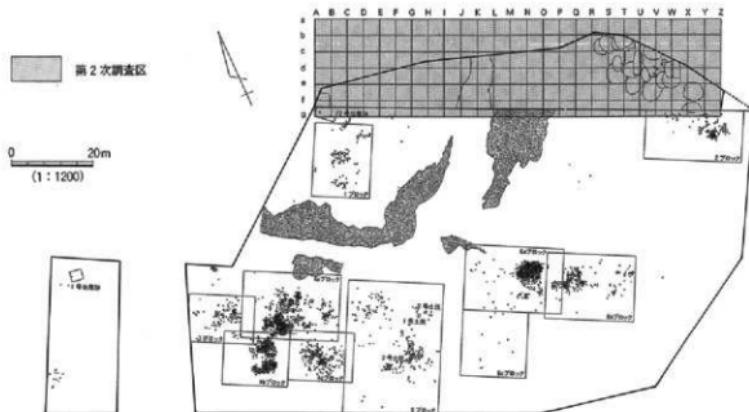
北柳1遺跡は、山形市の北部、山形市大字青柳字北柳に所在する。JR奥羽本線南出羽駅の南方約350mに位置し、高瀬川と馬見ヶ崎川の合流点の間にあり、標高は約106mを測る。

この付近は、奥羽山脈の面白山に源を発して須川に注ぐ立谷川と、立谷川の南を西流して馬見ヶ崎川に注ぐ村山高瀬川との2つの河川によって形成された複合扇状地の扇端部にあたる。現在は、人為的な変化を受け、平坦化された水田地帯と1本の河道に落ち着いている高瀬川であるが、明治34年の地図(大日本帝国陸地測量部/2万分の1)では、北側に幾本もの支流が見られ、現在の航空写真でも旧河道が観察される。

のことから、この地域は、高瀬川が扇状地の常で度重なる氾濫を繰り返し、幾度となく河道を変え、また氾濫によって上流から運ばれた土砂等が堆積して地形が形成されたことが窺われ、時折襲う洪水が後背湿地に適度の肥料分を供給したものと思われる。生産基盤としては好条件を備えた地域だったと考えられる。

2 歴史的環境

本遺跡周辺には、立谷川の扇状地や村山高瀬川扇状地の自然湧水の豊富な扇端部付近に遺跡が集中して分布する。本格的な稲作が営まれる弥生時代中期以降の遺跡は扇状地扇端部付近に多く見られ、本遺跡の周囲には県内の弥生時代を代表する遺跡が多く存在する。これらの遺跡



第1図 遺跡概要図



1. 北柳 1 遺跡 2. 北柳 2 遺跡 3. 下柳 A 遺跡 4. 漆山長表遺跡 5. 梅ノ木遺跡 6. 一ノ坪遺跡 7. 下柳 B 遺跡 8. 西ノ神遺跡
 9. 白山堂遺跡 10. 間所免古墳 11. お花山古墳群 12. 長町北河原遺跡 13. 長町遺跡 14. 今堀遺跡 15. 塙田 D 遺跡 16. 五反遺跡 17. 七浦遺跡 18. 七浦古墳群 19. 七浦 2 号墳 20. 洪江遺跡 21. 衛守塚 2 号墳 22. 衛守塚古墳群 23. 漆山遺跡
 24. 柴崎古墳群 25. 火矢塚 1 号墳 26. 火矢塚 2 号墳

第2図 遺跡位置図（国土地理院発行 2万5千分の1地形図「山形北部」を使用）

の多くは水稻耕作を中心とした集落跡と考えられている。

本遺跡の北2kmに位置する漆山遺跡では、磨削縄文主体の土器が出土し、中期折形團式併行として「漆山式」が提唱されている。また西0.8kmに位置する七浦遺跡では、平行沈線文の桜井式併行の土器が多数出土し、「七浦式」が提唱され、石包丁が3点出土している。南西3.5kmに位置する江俣遺跡は七浦式に後続するとされる「江俣式」の標識遺跡で、ここでは初痕をもつ土器と石包丁が出土し、弥生時代後半段階に山形盆地南半で水稻耕作が一般化していた証左として七浦遺跡とともに重要視されている。他の弥生時代の遺跡としては長町遺跡、長町北河原遺跡、西ノ神遺跡、境田D遺跡が知られており、いずれも広義の桜井式が出土している。

古墳時代に入ると盛んな生産活動の結果、より大規模な集落が営まれるようになる。高瀬川の対岸に位置する下柳A遺跡は、1995年に緊急発掘調査が実施され、古墳時代中期の堅穴住居跡が21棟検出され、弥生時代後期の天王山式も出土している。お花山古墳群は昭和57~58年に山形県教育委員会によって調査されている。木棺、石棺、箱式石棺等を埋葬施設とする24基の古墳が検出されており、時期的には5世紀末葉から7世紀前半と位置付けられている。崩端部には、古墳時代後期を中心とする七浦古墳群、衛守塚古墳群、柴崎古墳群等の平地に作られた古墳が、旧羽州街道沿いに点在している。また7~8世紀の集落遺跡で国史跡である鷲遺跡は南西約3kmに位置している。

このように当地域には、弥生時代中期から奈良・平安時代の遺跡が多数存在しており、稻作の生産地帯として積極的に開拓が行われていたことが推測される。

III 遺跡の概要

1 遺跡の層序

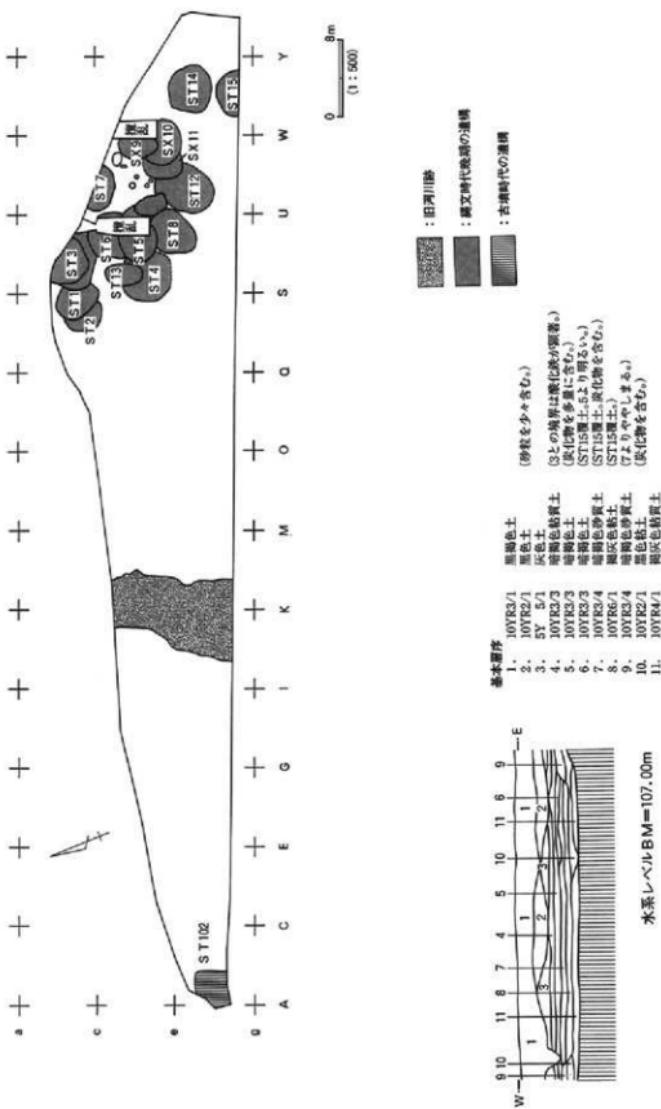
北柳1遺跡は、前述のとおり扇状地に立地しており、また調査区の南約100mには高瀬川が現在も流れている。今回の調査区内にも旧河道と思われる川跡が見つかっている。このため土層が不均一であった。ただし、遺構の集中している東1/3の地点では、遺物を包含する暗褐色の粘土質層と、その下層の褐灰色粘土層が安定しており、これを鍵層として遺構検出を行った。

本遺跡の基本層序は、第4図に示したとおりである。1~3層は、旧表土上に盛られた盛土であり、調査に直接関係のない層である。4層が旧表土である。地目が水田であり、4層の下層にはその影響による酸化鉄の沈殿が顕著である。5~10層までが遺物包含層である。5層は特に炭化物を多量に含んでいる。6~8層が堅穴住居跡の覆土で、地山とした9~10層とは土の締まり具合、砂質土を含むかどうかの違いしか認められない。ともに暗褐色粘土質土である。11層は無遺物層で、地点によってはこの層が確認できないところもある。褐灰粘土質層である。この層の下には黒色の泥炭層が続くが、遺物の包含は認められない。

2 遺構・遺物の分布

遺構は、縄文時代終末期の堅穴住居跡が11棟、堅穴状遺構が3棟、大型の土壙が2基、遺物集中域が1箇所である。他に古墳時代の堅穴住居跡が1棟、旧河道が一本確認されている。

第4図 遺構配置図



第3圖 基本屬序

調査区は概ね西から東へ緩やかに傾斜しており、西端のY-e付近で標高106.40mを、東端のA-e付近で標高105.97mを測る。およそ40cmの高低差がある。特にJグリッド付近で旧河道に伴い急激な傾斜変換点が確認できる。また、Qグリッド以東はおよそ標高106.40mを測り、ほぼ平坦であるが、eグリッド付近に旧畦畔が確認され、それ以南では10cm程傾斜している。調査区の中央J-e-N-gグリッド間に調査区を南北に横切る幅9m~14mの旧河道が確認される。これは第1次調査時にも確認されている。この旧河道以西は、前述のように調査区東半に比して40cmの高低差が存し、ほとんど遺構の分布が確認できなかった。唯一、古墳時代の竪穴住居跡が調査区西端に1棟確認できたが、これも第1次調査時に確認された竪穴住居跡の一部である。これに対して、旧河道以東はR-c-Y-gグリッドに竪穴住居跡・竪穴状遺構・土壙が集中する。

遺物は、今回の調査では、コンテナで35箱出土している。ほとんどが縄文時代終末期の土器で、20箱を数える。残りの大部分が砾で、石器類はわずかしか確認できなかった。遺物の分布は、ほぼ遺構の分布と符合し、中央の旧河道およびそれ以西では遺物の出土はほとんど確認できなかった。西端の古墳時代の竪穴住居跡および旧河道から古墳時代の遺物が数点出土したが、図示できなかった。また旧河道東の包含層からわずかに3点の出土を見た。

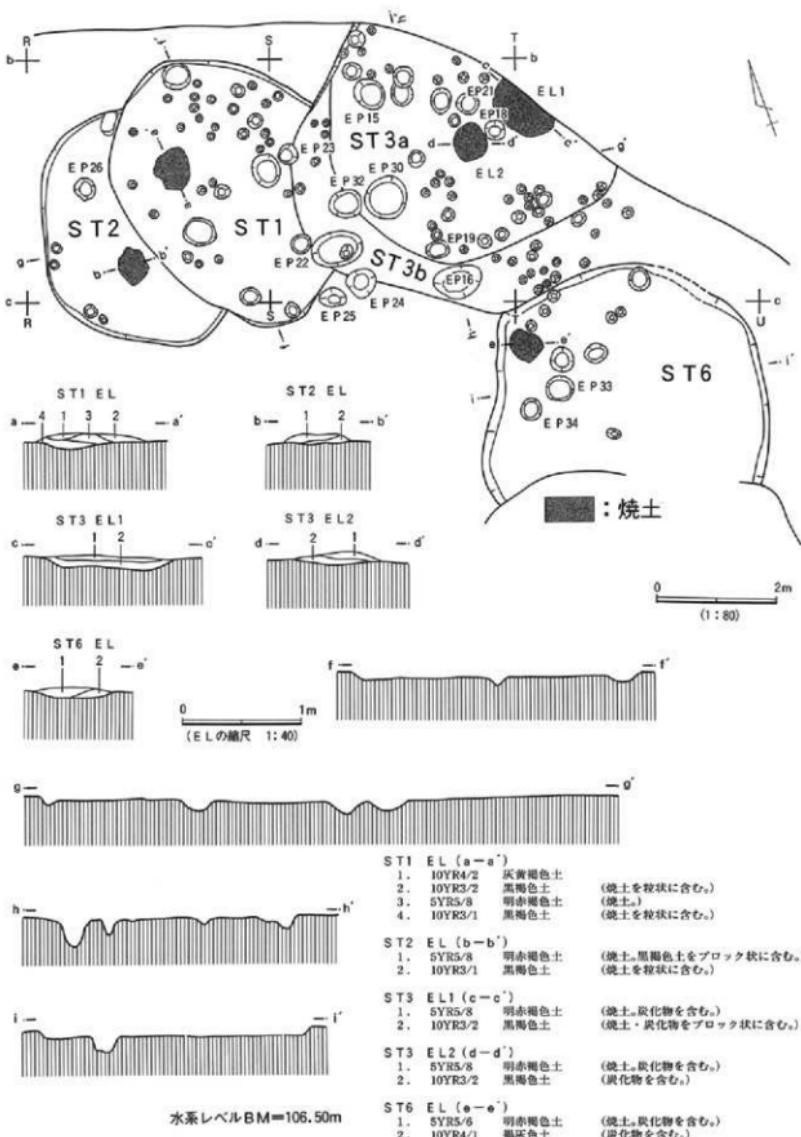
ほぼ全ての遺物は、旧河道以東の安定した比較的平坦な地点から出土している。遺構内に含まれる遺物も多数存在するが、遺構とは確認できない地点からの出土もある。なおeグリッド付近に水田の旧畦畔が検出されたが、ここを傾斜変換点としてこれより南側は段差を持って傾斜する。この地点からの遺物の出土は少ない。は場整備事業の際に削平された可能性がある。

IV 検出された遺構

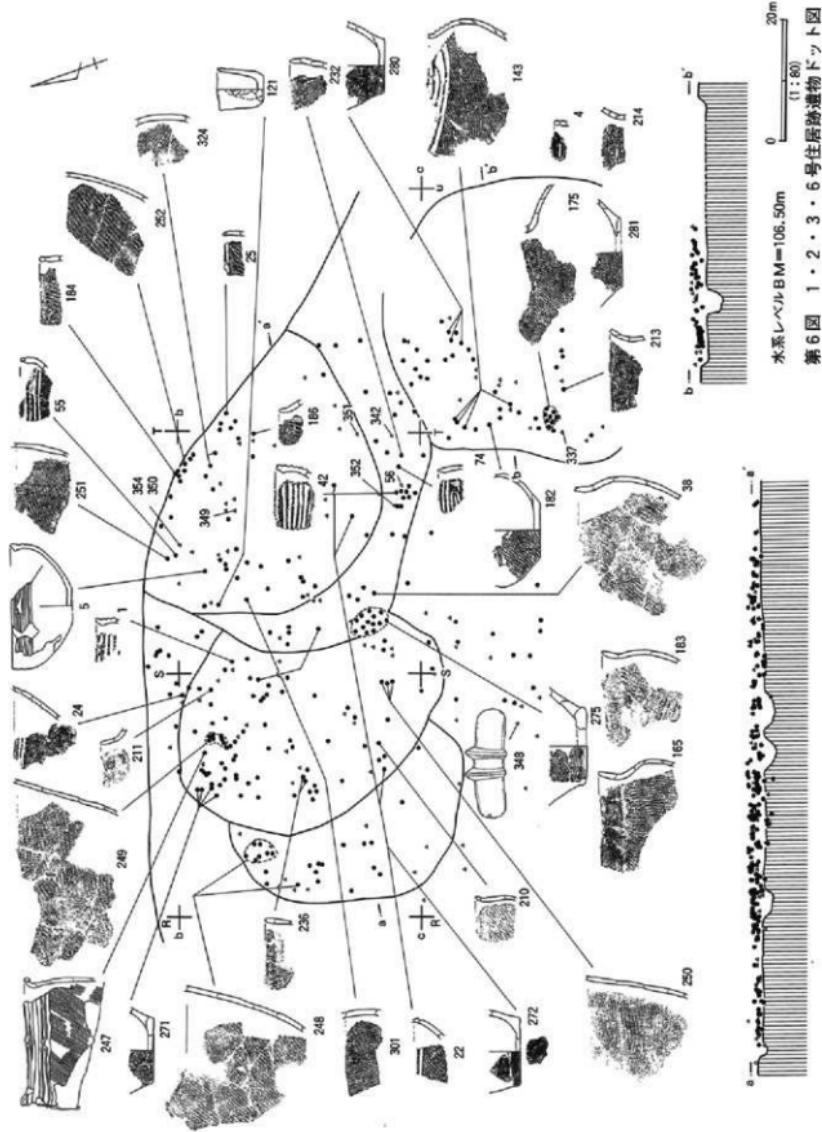
S T 1 (第5図)：調査区北東付近のR-S-b区を中心に位置する。平面形は遺構東側がS T 3に切られるため全体形は不明であるが、南北長軸4.8mの梢円形を呈すると思われる。検出面より深さ10cmで床面が確認され、覆土中には少量の炭化物を含む。床面はほぼ平坦であるが、全体的に南側へ傾斜する。壁の立ち上がりは緩やかである。住居には多数のピットが検出されたが、それらは比較的浅く、柱穴とは認めがたい。また、住居中央付近の西寄りに、南北70cm、東西50cmの範囲に焼土の広がりが認められた。床面を若干掘り窪めているため地床炉と考えられる。遺物出土は住居全体に認められるが、特に北半域に集中する。検出面及び覆土中からの出土が大半である。

S T 2 (第5図)：R-b区を中心に位置し、東半をS T 1に切られ全体形は不明であるが、南北軸は4.2mを測る。検出面より深さ10cmで床面が確認され、ほぼ平坦であるが、S T 1と同様に全体的に南側へ傾斜する。壁の立ち上がりは緩やかである。住居には小ピットも含め5基検出され、深さ10cm程度である。住居中央付近の南寄りに、南北60cm、東西50cmの範囲に焼土の広がりが認められた。床面直上に分布し、炉跡と考えられる。出土遺物は住居の北半域に集中する。検出面及び覆土中の出土が大半であった。

S T 3 (第5図)：S-T-a-b区を中心に位置する。遺構の北側は調査区外になるため調



第5図 1・2・3・6号住居跡



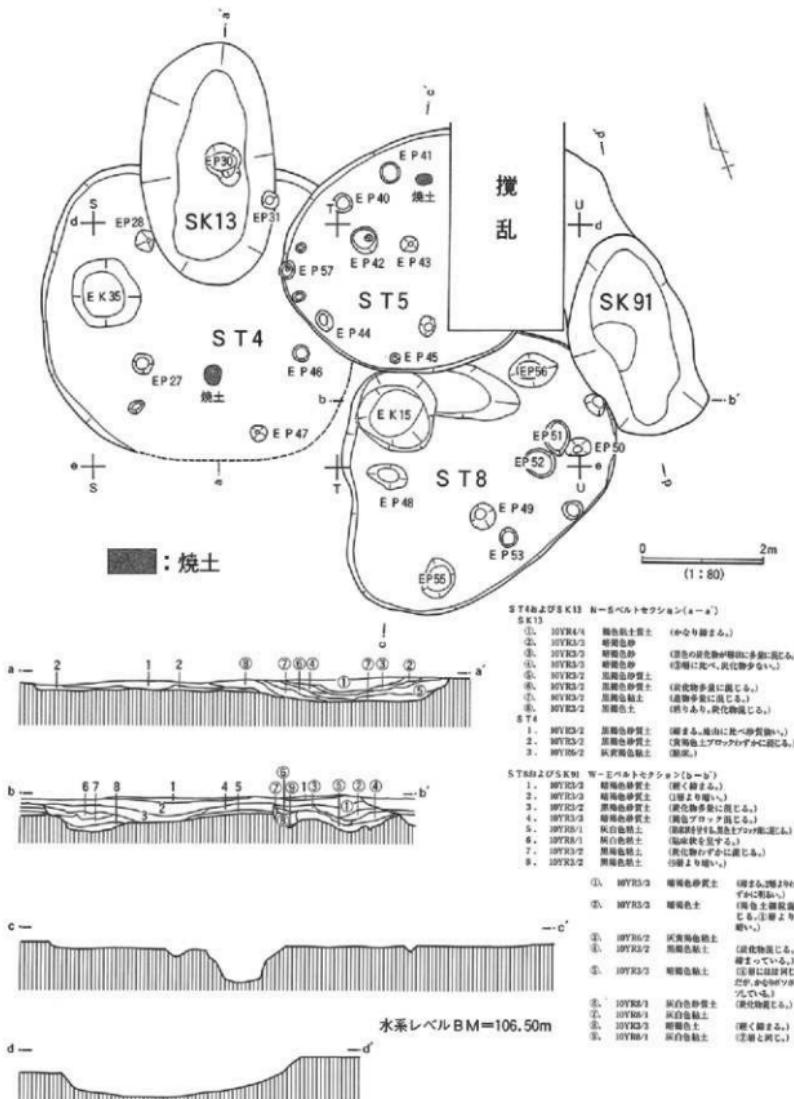
査できなかつたが、平面形は円形を呈すると思われる。S T 3 には 2 棟の重複が見られ、その前後関係は、S T 3 a → S T 3 b である。S T 3 a は、直径約4.8 m の円形を呈すると思われる。検出面より深さ15cmで床面が確認され、覆土中には少量の炭化物を含む。ほぼ平坦であるが全体的に南側に傾斜する。S T 3 b は、最大東西幅5.4 m 以上、南北幅4.1 m 以上を測る。全体的に南側に傾斜し、S T 1 を切り、S T 6 に切られる。床面はほぼ S T 3 a と同じであるが、縁辺部において相違が見られ、S T 3 a は若干掘り込んでいる。壁の立ち上がりは各々緩やかである。S T 3 内には多数のピットが検出され、それぞれ深さ10cm程度で、柱穴とは認めがたい。しかし、E P 16・17は深さが40~50cm、配置は不明であるが、柱穴の可能性が高い。住居中央付近には 2 つの焼土の集中堆が確認され各々炉跡と考えられる。E L 1 は、長軸110cm、短軸60cm以上を測り、床面を掘り廻めた地床炉と思われる。E L 2 は、直径約60cmを測り、同様に地床炉と思われる。これらは互いに近接し、検出面も同レベルであるが、どちらの住居に伴うものかは判然としない。これはピット等についても同じことがいえる。遺物出土は住居内全体に認められた。焼土の検出面と遺物のレベルがほぼ一致する。

S T 6 (第5図) : T - c 区を中心に位置し、遺構の南側を S T 9 に切られるが、推定直径4.8 m の円形を呈する。検出面より深さ15cmで床面が確認され、覆土中には少量の炭化物を含む。床面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかである。住居には数基のピットが確認されたが、柱穴とは認めがたい。住居北西付近に、南北50cm、東西60cmの範囲に焼土の広がりが認められた。床面直上に分布し炉跡と考えられる。出土遺物は住居の西半城に集中する。床面からの出土はほとんどなく、検出面及び覆土中からの出土であり、住居の廃絶後、廃棄された可能性が高い。

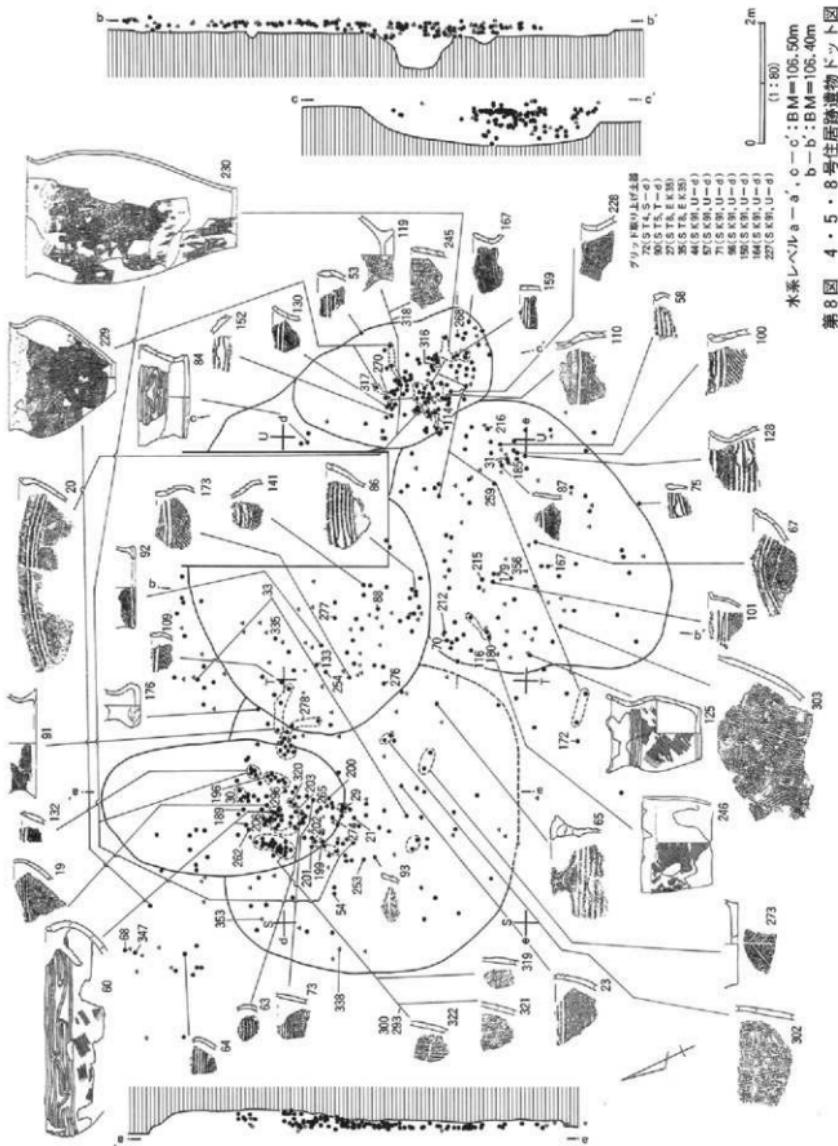
S T 4 (第7図) : S - d 区に位置する。北側中央を S K 13 に切られ、東端を S T 5 に切られる。直径5.7 m の円形を呈す。検出面からの深さは約10cmで、掘り込みは浅い。床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。主柱穴として E P 28・29・31 があり、深さ約22~28cmを測る。側柱穴として壁際に 3 基が確認できるが、深さ 6 cm 程の掘り込みで、柱を埋め込むのは困難である。遺構内の施設として西端に径約 1 m 、深さ 37 cm の E K 35 がある。遺物は数点しか出土しなかつた。南壁近くに焼土が確認できたが、レベルは床面より 5 cm ほど浮いている。遺物の分布は北側中央付近に厚く、出土レベルは 20 cm の範囲内に収まる。

S K 13 (第7図) : S - c 区に位置する。S T 4 を切る。長径約 4 m 、短径 2.2 m の南北に長い大型の楕円形を呈す。検出面からの深さは 40 cm で、中央部がもっとも深く緩やかに立ち上がる。土層の 3・6・7・9 層に多量の炭化物を含み、遺物も多い。遺物の出土レベルは出土位置により異なり最深部では上層と最下層の 35 cm の範囲内にある。土壤の濃い部分では、S T 4 と同様に約 20 cm の範囲に収まっている。形状、出土遺物から S K 91 とはほぼ同じ時期のものと考える。かなりの大型で、小判状を呈することから墓壙に類するが、出土した大型の深鉢に炭化物が付着することや出土遺物も多岐にわたることから、墓壙ではなく捨て場として使われたものと考える。

S T 5 (第7図) : T - d 区に位置する。S T 5、8 を切っている。東半は分布調査時の試掘



第7図 4・5・8号居住跡



水系レペル a-a': c-c': BM=106.50m
 b-b': BM=106.40m
 第8図 4・5・8号住居跡遺物ドット図

溝により搅乱されている。直径3.9mの不整円形を呈す。検出面からの深さは約16cmで、直に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。主柱穴は、E P 42が確認されたのみである。深さ36cmを測る。側柱穴として壁際にE P 40~45・57が確認できる。深さは浅いもので6~10cmを測り、深いもので12cmを測る。遺構に伴う土壌は確認できない。北壁近くに焼土が確認された。遺物の分布は西端に厚く、出土レベルは20cmの範囲内に入るが、多くは上層の10cmの範囲に収まる。焼土と遺物のレベルはほぼ同じで、ともに床面より8cm程浮いている。これは精査時の掘り過ぎによるもので、床面がより高いところにあったものと考えられる。

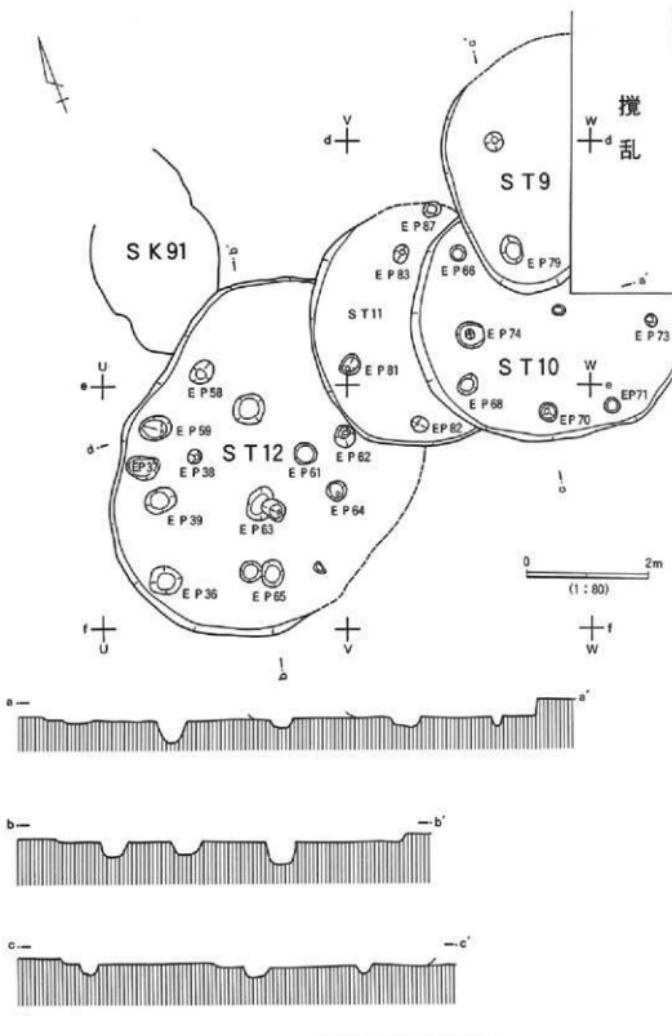
S T 8 (第7図)：T-e区に位置する。東端をS K 91に切られる。S T 4との切合の関係は不明。長径5.3m、短径4.1mの不整楕円形を呈す。検出面からの深さは約16cmで、立ち上がりは緩やかである。床面はほぼ平坦であるが、やや南側に傾斜している。柱穴は深さ10~18cmで、壁際に配置される。北西端には径約1.3m、深さ30cmの大型の土壌が位置する。土壌断面から住居に伴うものと考える。炭化物を多量に含み、やや袋状に膨らむ。遺物は上層から数点出土したのみである。遺構全体の遺物の分布は北半に厚い。南半は旧畦畔より南で段差を持ってレベルが下がり、遺物も少ない。出土レベルは25cm間に収まり、ほぼ床面からの出土である。

S K 91 (第7図)：U-d区に位置する。西端でS T 5と接するが切り合い関係は不明である。同じく西端ではS T 8を切る。東端でS T 12に切られる。長径3.3m、短径2mの南北に長い大型の楕円形を呈す。検出面からの深さは60cmを測る。土壌は炭化物を多量に含み、遺物も多量に含む。遺物の分布は南半に集中し、北半からの出土はほとんどない。出土レベルは最下層から最上層まで分布しているが、中層・上層に厚い。高低差は75cmに達する。重複関係からS T 8から流れ込みが考えられる。特記すべき遺物としては第22図229と第23図239が挙げられる。239は条痕文を施文する粗製の大型の深鉢で、229も条痕文を施文する粗製の中型の深鉢である。共に中層からの出土が多く、ある程度埋没したち土器を廃棄したものと思われる。239はこの土壌のみではなく、S K 13からも接合しており、意図的に分散して捨てた可能性が指摘できる。このことからS K 91とS K 13はほぼ同じ時期に埋没していたと思われる。またこの土器は墓壙から出土する土器棺に類似するが、炭化物が付着しており、土器棺とは考えがたい。S K 91もおそらくS K 13と同様にごみ捨て場として使用されたのではないかと考える。

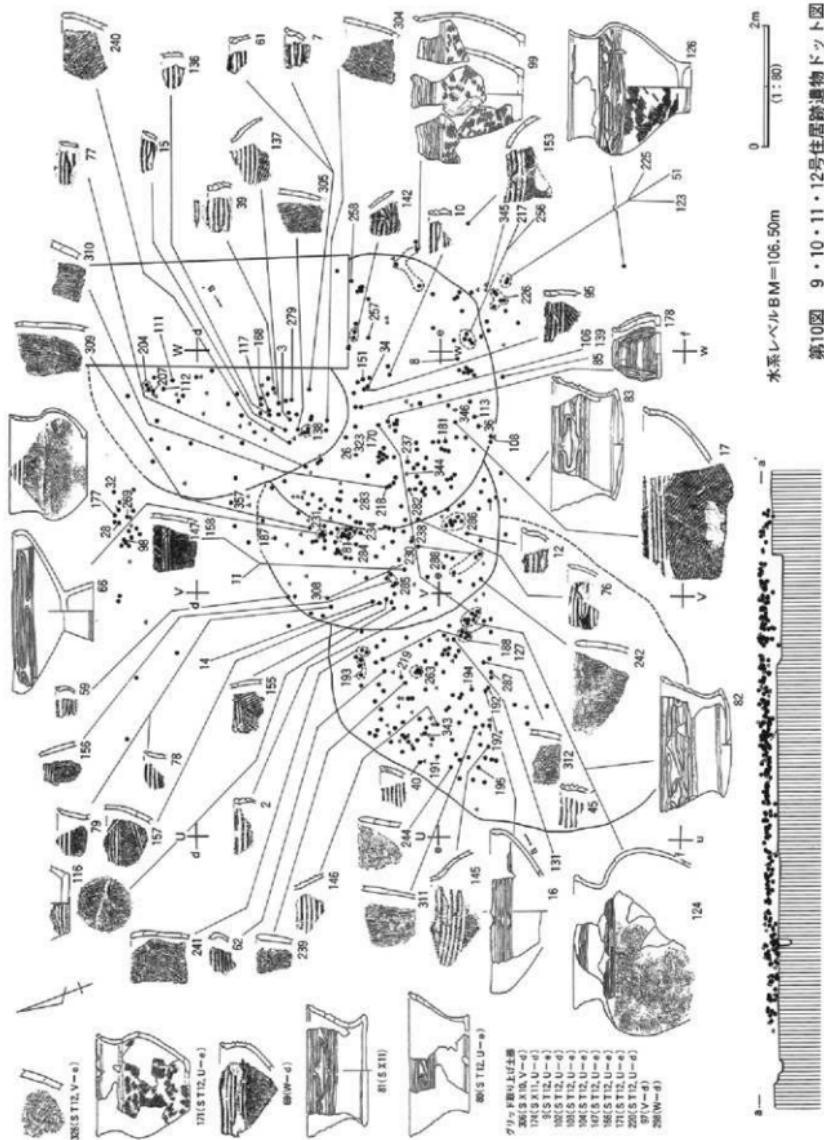
S X 9 (第9図)：V-d区に位置する。第9図ではS X 10を切るように図示したが、重複関係は不分明であった。東半を分布調査の試掘溝で搅乱されている。プランは詳らかでなかったが、推定直径4mの円形を呈す。検出面からの深さは16cmである。床面はほぼ平坦である。柱穴はE P 79・80の2基確認でき、それぞれの深さは22cm、17cmである。焼土や土壌は確認できなかった。遺物は南半に集中する。

S X 10 (第9図)：V-d区に位置する。プランおよび重複関係が不明で、S X 11と同一遺構の可能性が高いが、当初の検出プランをそのまま図示した。推定直径4.5mの円形を呈す。床面は平坦である。深さ10~20cmの柱穴が壁際を巡る。遺物は全体に広がり特に西半に集中する。焼土や土壌などは確認できなかった。

S X 11 (第9図)：V-d区に位置する。プランおよび重複関係は不明である。S X 10と同様



第9図 9・10・11・12号住居跡



に当初のプランを図示した。推定直径4mの円形を呈する。床面は平坦である。なお西端で砂質の地山と接し、立ち上がりが確認できる。柱穴は4基確認され、10cmの深さを測る。遺物は遺構全体に広がり、特にS X 10と接する地点が特に厚い。

S X 9～11については、プランが不明であり、遺物も密集して出土している。本来は一つの遺構あるいは遺物の集中域として考えるべきところだが、柱穴の存在などからそれを竪穴状遺構として図示した。遺物の分布であるが、全体に当初床面とした地点より、浮き上がった状態で出土している。出土レベルは20cmの範囲に入る。なお特筆すべき点として、第17図66の台付浅鉢は、遺構内のE P 83内出土の破片2点と接合した。このことから遺物の集中域の土器を流れ込みと考えるのも不自然と思える。また、接合の事実からすれば、床面を遺物出土レベルと考え、調査の過程で床面を飛ばしたと考えるべきかもしれない。

S T 12(第9図)：U-e区に位置する。北西端でS K 91を切り、北東をS X 11に切られる。平面プランは長径6m、短径4.5mの楕円形を呈する。検出面からの深さは10cmで、床面はほぼ平坦だが、南へやや傾斜する。主柱穴はE P 14・38・63・65で、それぞれ38cm・20cm・22cm・20cmを測る。他に壁際に深さ6～10cmの柱穴が巡る。焼土・土壤は確認できなかった。遺物はeグリッド以北に集中する。出土レベルは30cmの範囲に収まり、ほぼ床面上から土層上面まで分布する。

S T 7(第11図)：U-c区に位置する。調査区外に約半分かかるため全体形は確認できなかつたが、直径4.5mの円形を呈する。検出面からの深さは16cmを測り、床面はほぼ平坦で立ち上がりは緩やかである。主柱穴はE P 96・101で、深さはそれぞれ36cm・26cmを測る。住居では焼土、周溝は確認できなかった。住居西端に、直径約1.6mの円形を呈する大型の土壤が確認できた。覆土に多量の炭化物を含み、礫が多量に積まれている。土器は上層から最下層まで含まれる。土器の分布はこの土壤内に集中し、その他の地点からはわずかに出土したのみである。遺物の出土レベルは土壤内を除くと16cmの範囲に収まる。

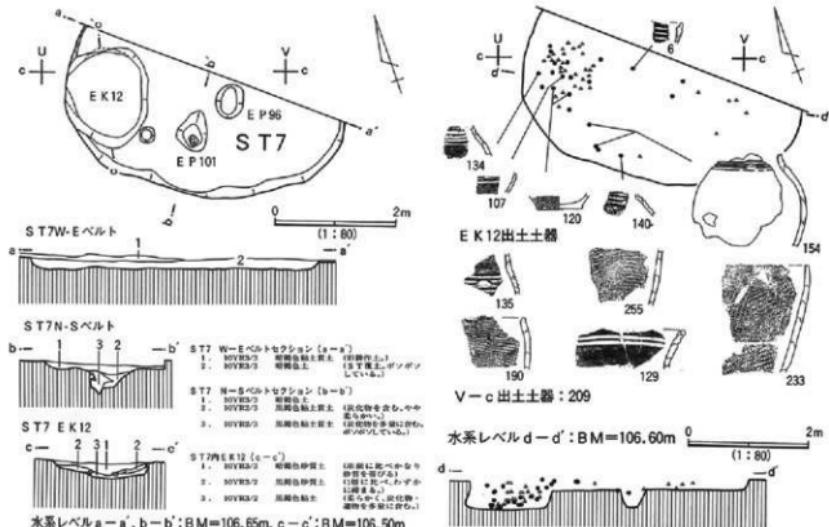
S T 14(第13図)：X-e区に位置する。平面形は、最大東西幅4.8m、最大南北幅4.2mの不整円形を呈し、遺構検出面より深さ15cmで床面が確認され、覆土中には少量の炭化物を含む。床面はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりは緩やかである。多数のビットが検出されたが、配置は不規則であり、その深さも床面より約15～30cmと比較的浅く、柱穴とは認めがたい。なお、貯蔵穴、炉跡等の付属施設は確認されなかった。遺物の出土は住居内全体に認められるが、特に南半域に分布が集中する。出土遺物は住居床面からはほとんどなく、検出面及び覆土中からの出土が大半であり、住居一括というよりは住居廃絶後、廃棄された可能性が高い。

S T 15(第13図)：S T 14の南に接し、X-f区に位置する。遺構南側は調査区外になるため調査できなかつたが、平面形がほぼ円形を呈すると思われる。最大径で約4.7mを測る。1次調査でいう2ブロックの遺物出土の分布域と本住居跡がほぼ接することから一連のものである可能性が高い。遺構検出面からの深さ約15cmで床面が確認され、覆土中には少量の炭化物を含む。床面はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりは緩やかである。住居縁辺部には溝状の落込みが認められることから、部分的ではあるが周溝が存在したと思われる。また、E P 94をはじめ、

床面より深さ約30~40cmのピットが数基存在することから、配置は不規則であるが柱穴の可能性が高い。なお、貯蔵穴、炉跡等の付属施設は確認されなかった。遺物の出土は住居内全体に認められるが、特に住居北寄りの中央付近に集中する。これらの遺物も検出面及び覆土中からの出土が大半であり、床面からの出土がほとんど認められることから、住居廃絶後、廃棄された可能性が高い。

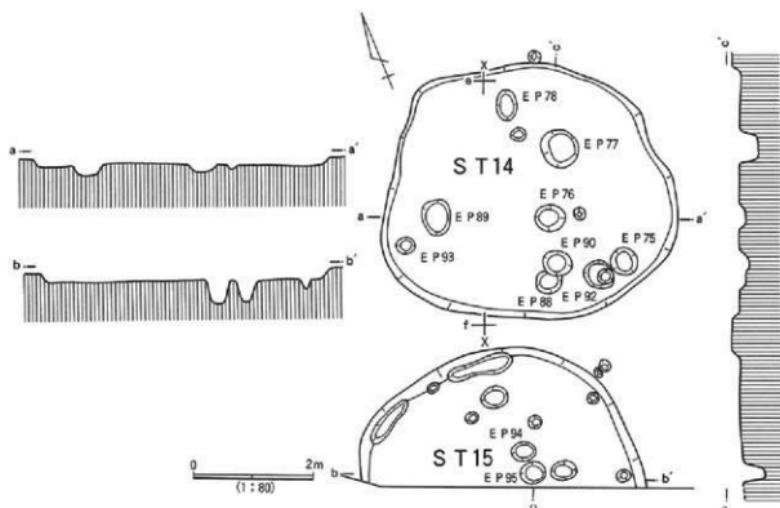
遺物集中域：S T 14の北東付近、X-d区を中心に遺物の集中域が確認された。その分布は $2 \times 1.5\text{ m}$ のブロックを中心に構成され、出土レベルは106.5mとほぼ均一であり遺構は確認されなかつたが、何らかの遺構の可能性が高い。

S T 102 (第14図)：A-f区に位置する。当初1次調査で検出された2号住居跡と本住居跡が接することから同一遺構と考えられたが、その後の整理作業で平面プランに整合性がなく、別個の住居跡が重複していた可能性も否定できない。古墳時代の所産である。検出部から推定すると、平面形態は東西軸を長軸とする長方形を呈し、東西軸の長さは2.3m以上、南北軸の長さは1.3m以上を測る。東西軸を主軸とする主軸方位はN-52°-Wを測る。この土地は元々農地整理によって土地改良がなされ、住居跡覆土の下面まで耕作が及んでおり、旧表土(耕作土)を除去した時点で遺物が現れ、覆土は非常に薄く、最も厚い地点で10cmであった。壁の立ち上がりは緩やかである。また遺構中央付近からは炭層及び炭を混合する焼土ブロックが検出された。壁溝、柱穴は検出できなかつた。遺物は土師器の破片が数点出土した。いずれも小破片で固化できなかつた。



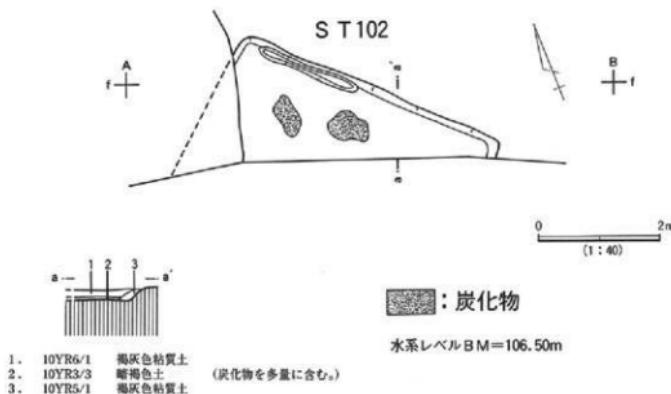
第11図 7号住居跡

第12図 7号住居跡遺物ドット図



水系レベル BM=106.50m

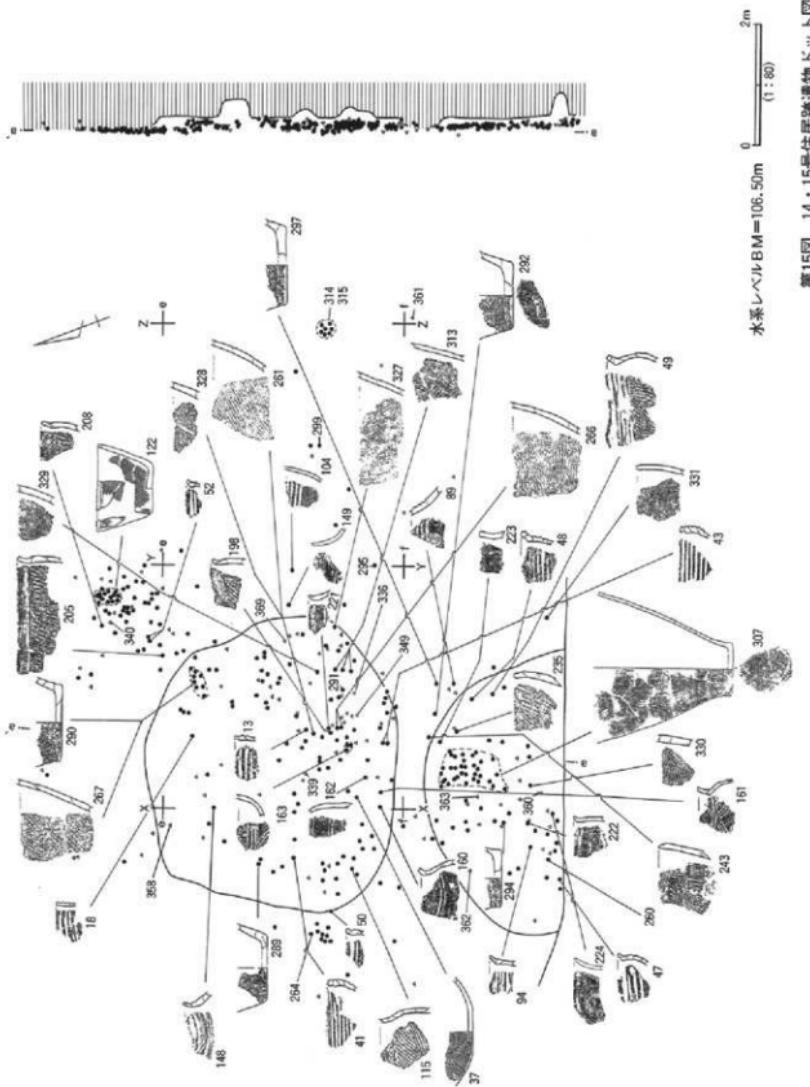
第13図 14・15号住居跡



1. 10YR6/1 黄灰色粘質土
2. 10YR3/3 斷褐色土
(炭化物を多量に含む。)
3. 10YR5/1 黄灰色粘質土

水系レベル BM=106.50m

第14図 102号住居跡



第15図 14・15号住居跡遺物ドット図

V 出土した遺物

1 土器・土製品

本遺跡から出土した遺物は、ほとんどが土器で、その大半が縄文時代最終末期の大洞A式新段階もしくは大洞A'式の古段階の土器である。このため土器は、文様分類せず、器種別とした。中に、弥生時代中期桜井式や古墳時代中期の土器が僅かに出土しているため、最後に一括してまとめた。

浅鉢形：器高が口径以下のものである。

(1) 口縁部から頭部の形状から4種類に分けられ、さらに口唇部などの状態から細分される。

A類：体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がほぼ直立あるいは外傾するもの。

B類：体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が強く内弯するもの。台付浅鉢形になるものと区分が困難なことから、台付浅鉢をこれに含む。

C類：体部から口縁部へとほぼ直線的で、しかも外傾気味に立ち上がるもので、逆台形状をなすものや、底部が張り出するもの、口縁部が少し内弯するものがある。

D類：C類に類似するが、底部付近が外反し、体部から口縁部へと直線的に立ち上がるもので、底部が平底気味のものや丸みを帯びるものなどがある。

・ A類（第16図1～45、図版4）

A1類（第16図1～20）：口唇部は細い粘土紐を貼り付け、内外面から沈線によって押さえられ、丸棒状を呈する。口唇部が平坦もしくは外傾するものがある。外面には数条の平行沈線が描かれ、隆線手法により陽部強調がなされる。5・7・10・12・15・16・17のように2条の隆線が結合し匹字状の基本単位文様がみられ（以下「匹字文」）、4単位もしくは5単位施文される。匹字文は、上下一組で施文されることが多く、上下に対向するもの（16）、間隔を空けて上下交互に施文するもの（5）がある。口縁部は平坦口縁のものが多いが、16のように二山の山形突起を有するものもある。口内には一条の沈線が巡るものがほとんどである。

A2類（第16図39～45）：A1類とほぼ同じ器形だが、頭部から口縁部にかけて内側への屈曲が強い。外面の平行沈線の条数が多く、器厚も厚い。内面に沈線が巡るもの（39・41～43・45）と巡らないもの（40・44）がある。また45以外は口唇部直上に沈線が巡る。

・ B類（第17図46～67・69、図版5）

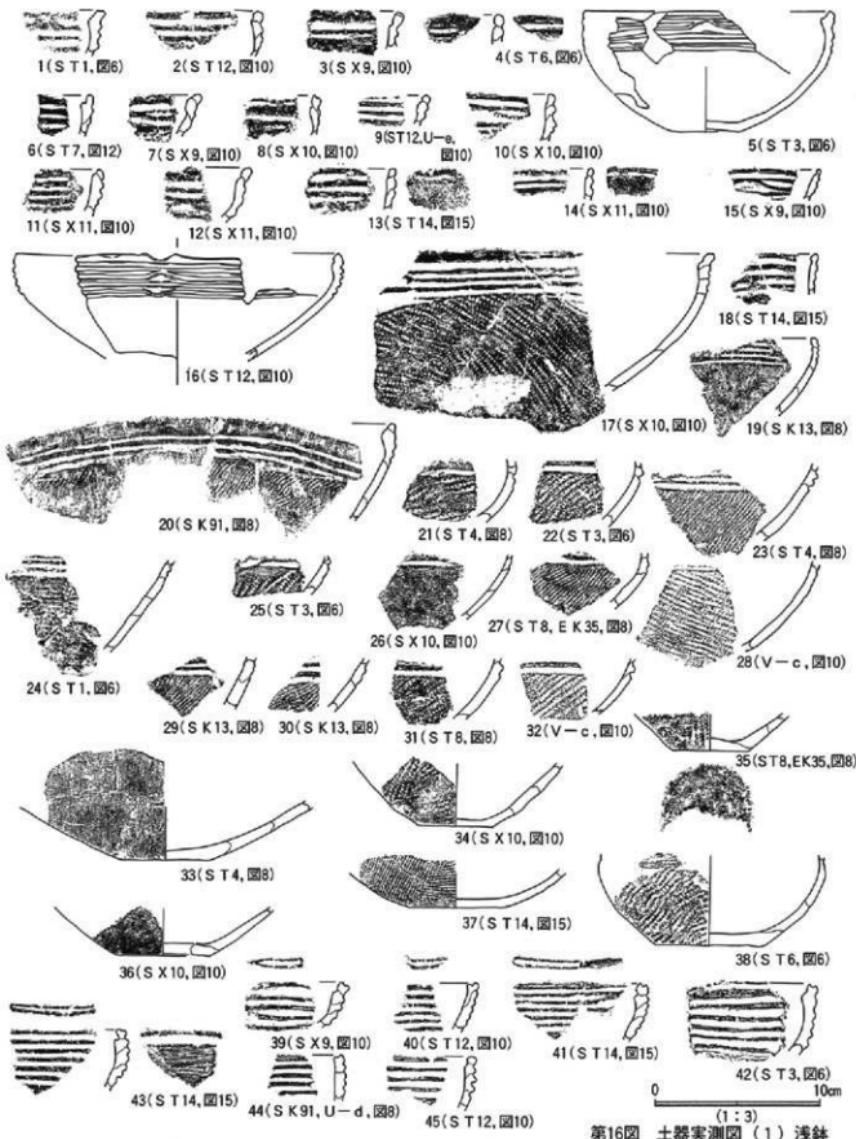
B1類（第17図46～49・57・69）：山形突起を有するもの。いずれも口唇部に粘土紐を貼り付け、山形突起を作り出す。46は二山状の突起を有し、他のものとは趣を異にする。いずれも内面に1条の沈線を有するが、口唇部が外側に大きく張り出すことにより沈線というより段と化したものもある（48・49・57・69）。口頭部には5条の平行沈線が配されるが、口唇部との接点の沈線は、粘土を削り出し段差の不明瞭なものが多い。平行沈線は深く明瞭で沈線間の隆線部の断面形が台形状をなすもの（47・48・49・69）と三角形をなす浮線的なもの（46）にわかれれる。文様は匹字文を上下に対向させるものが多い（46・47・49・69）。なお、47～49は同一個体の可能性が高い。49は体部から頭部にかけての屈曲が大きく、台付になる可能性もある。57は沈線間が深く明

瞭で山形突起の頂部はわずかに二山状に刻まれる。山形突起の内側はわずかに抉られ、口唇は肥厚する。文様は鈴木正博氏の言う上下対称の匹字文系単位文と斜位の補助単位文を交互に配置する変形匹字文（以下「変形匹字文」と呼ぶ）の斜行沈線部分と思われる（鈴木正博「弥生式への長い途」『古代』第80号 早稲田大学考古学会 1985）。なお口頭部の文様帶は赤彩される。69は口唇部があまり張り出さず、ほぼ垂直に立っている。口唇部直上には1条の沈線が巡り、B 1類の他のものと異なる。文様帶は5本の平行沈線と上下に対向する匹字文からなり、匹字文は4単位若しくは5単位からなる。体部は無文である。恐らく台付浅鉢の口頭部である。

B 2類（50～56・58～61・66）：平坦口縁を有するもの。口唇部が丸棒状を呈し内傾するもの（55・60）、口唇部が丸棒状を呈して外に張り出するもの（50・51・52・56・59・61）、口唇部が肥厚して内傾するもの（53・54）、口唇部が肥厚して口唇直上に沈線が巡るもの（58）に分けられる。いずれも口頭部に平行沈線を有する。55は中央に匹字文を確認できる。59は文様構成が異質で変形工字文を施す。60は底部と全体形の1/2を欠くがほぼ全体を推測できる資料である。底部から体部にかけ緩やかに内弯し、頭部から口縁部にかけて大きく内側に屈曲する。底部を欠損するが台付ではなく浅鉢A類に近い。口唇部は細い粘土紐を貼り付け、内外面から沈線により押さえ込む。口頭部には6条の平行沈線を有し、口縁直下に匹字状の彫去が推定4単位認められ、その下に変形匹字文が半単位毎に描出される。頭部文様と体部文様が上下に重なった例と考えられる。体部にはL R単節繩文を横位に施す。66はほぼ器形全体が窺える台付浅鉢である。S T 11の床面とE P 83から出土している。坏部は、底部から頭部にかけて緩やかに内弯し、頭部から口縁部にかけて大きく内側に屈曲する。口唇部は直立し、やや長い。この部分は粘土紐を貼り付け、内外面から沈線により押さえられる。内面の沈線は浅く、わずかに稜が認められる。外面の沈線は体部境まで存在し、7条認められる。沈線間は比較的浅いが、よく磨かれ、幅も一定である。隆線手法により、隆線部の断面形は台形となる。文様は、上から2条目の沈線が下方に反転し、4条目の沈線として斜行する。これが左右対称に施され、反転部を基点としてやや幅広の三角状の文様（変形工字文）を描く。さらに4条目の沈線は半単位ずれたところでもう一度反転し、6条目の平行沈線となる。この基本文様は5単位をなすと思われる。沈線の反転部には粘土粒などの盛り上がりは認められない。体部はよく研磨されている。台部もよく研磨され、底部との境には1条の沈線が配される。焼成は良好で、器面は灰白色を呈す。文様的には大洞A'式と言ってよいが、周囲から出土した土器の特徴はほぼ大洞A式新段階と考えられ、時間差を有する。但し、遺物の出土状況を考えると、流れ込みということは考えがたい。前回1次調査時にも大洞A'式古段階の土器が大洞A式新段階の土器と近接して出土しており（小林圭一『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』P 75（財）山形県埋蔵文化財センター 1997）、混在と考えるべきか。さらに、土器の特徴が他の土器とは異なり搬入品を思わせる。

B 3類（48）：大型の突起を有するもの。単位数は不明だが円形の大型突起を有する。口唇部がわずかに外傾し、口唇直上には1条の沈線が巡る。口縁部の内外面とも沈線が引かれ、沈線間を広く削り取っている。結果、口縁部の内外面とも肥厚する。台付浅鉢と思われる。

B 4類（67）：その他。本来、浅鉢A類もしくは鉢形に入れるべき資料であるが、台付の可能



第16図 土器実測図（1）浅鉢

性が高いため敢えてB類に加えた。底部から緩やかに内弯して口縁部にいたる。緩やかな山形突起が見られるが、単位数は不明。口頭部に2条の沈線が巡るが、匹字状の文様は認められない。内面にも1条の沈線が巡る。器厚は3.5mmと薄い。体部にLR単節繩文が横位に施される。

・C類(第17図70・72・73、図版5)：今回の調査では、全体を窺える資料が確認されなかった。提示資料はすべて破片であり、口縁部の資料のみではD類との分別は困難である。いずれも平行沈線が認められる。

・D類(第17図68・74～81、第18図82～85、図版5)：口唇部は細い粘土紐を貼り付け、内外面から沈線によって押さえられる。断面形は丸棒状を呈する。器高の約1/2から上位に平行沈線を5～6条配す。沈線はいずれも深く明瞭でよく磨かれ、隆線手法がとられる。隆線部分は途中で上下に結合し、基本単位となる匹字文を描く。この文様間ににはさらに補助単位文として上下に対向する斜行沈線が配される(変形匹字文)。それぞれ3単位づつ交互に配置されると思われる。この口頭部は赤彩されることが多い(82～84)。体部はよく研磨され、全体に器厚は薄く、3.5mm～4.5mmを測る。体部の下端から底部にかけては大きく屈曲しながら張り出しが、屈曲の大きいものと小さいものがある。体部と底部の境界には1条の沈線が配される。底部は丸底のもの(82～85)と平底のもの(80・81・90～91)がある。82と83は同一固体であったが、接点がなく、別個に図示した。体部と底部の境界の内面に断面形が7×2mmの長方形を呈し棒状工具によって押さえられている痕跡が認められる。86は器厚が厚く、口唇部は粘土の貼り付けがなく、丸棒状の断面形にはならない。口唇部直上には1条の沈線が配される。また口頭部の沈線は6条配され、上下に対抗する匹字文が認められるが、D1類とは文様が異なり、基本単位文の間に配置される斜行沈線も認められない。のことから、C類の可能性もあるが、体部下半で外側に屈曲することからD類として図示した。

(2)浅鉢形土器の頭部・体部である。器形により4種に細分される。

・E類(第16図19・21～32、第17図62～64・73、第18図85・87～89、図版4・5)

E1類(19・21～32)：体部から頭部にかけて緩やかに内弯する。浅鉢形A1類の体部である。

E2類(62～64)：体部から頭部にかけて大きく内弯する。台付浅鉢の頭体部である。

E3類(73)：体部から頭部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。浅鉢形C類の頭体部である。体部はよく研磨される。

E4類(79・85・87～89)：体部から頭部にかけ直線的に開き、底部が張り出す。浅鉢形D類の体部である。体部はよく研磨される。

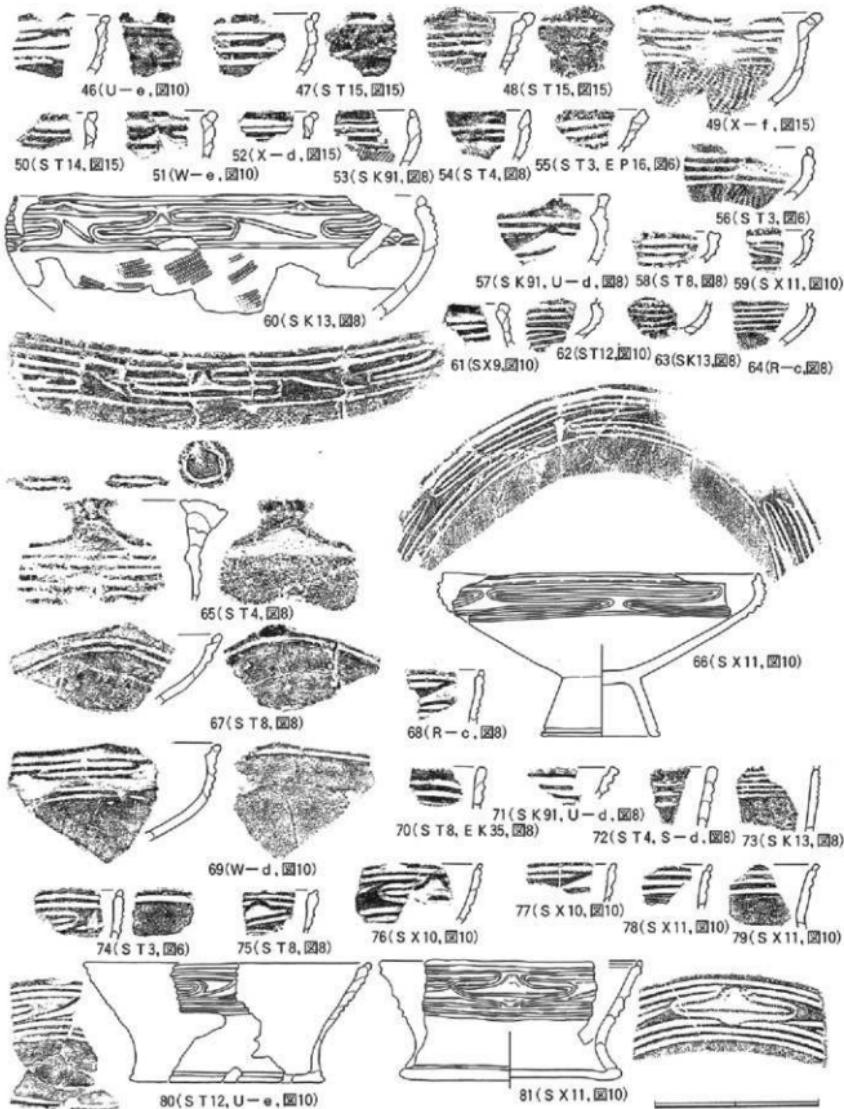
(3)浅鉢形の底部である。器形により3区分できる。

・F類(第16図33～38、第18図90～92)

F1類(33・36・37)：底径が口径に比して小さく、外に大きく開く。体部無文でよく研磨されたもの(33・36)と、地文に繩文を施すもの(37)がある。

F2類(34・35・38)：底径と口径の比がF1類より大きく、F1類より器高が高くなる。

F3類(90～92)：体部下端から屈曲して、底部が張り出す。体部と底部の境界に1条の沈線が巡る。丸底と平底の2種がある。浅鉢形D類の底部である。



第17図 土器実測図（2）浅鉢

鉢形：浅鉢形と深鉢形の中間形態で、口径に比して器高が同程度あるいはそれ以上のもの。

(1) 鉢形の口縁部は、口縁部の形状から3種に大別され、さらに口唇の状態により細別される。

A類：口縁部から体部にかけて緩やかに内湾するもので、装飾を持つ。

B類：頸部から体部にかけて緩やかに内湾、口縁部が屈曲し、短く立ち上がるもの。

C類：頸部で屈曲し、無文の頸部を持つもの。

・ A類（第18図93～98、図版6）

A 1類（93・94・96・97）：山形突起を有するもの。内面に沈線を有するもの（93・94・97）と沈線のないもの（96）がある。いずれも口頸部に平行沈線を有する。93は匹字状の文様が見えるが、粘土を押し上げ沈線間を彫去したものではなく、粘土を貼り付けて匹字状文を作出する。沈線間の磨きも丁寧ではない。沈線間は赤彩される。94は匹字文が上下に対向する。沈線の幅は一定ではなく、沈線間の磨きも稚拙である。96は山形突起の頂部が刻みによって二分される。突起以外は平坦でよく調整される。沈線間は狭く幅も一定ではない。体部に繩文が施される。

A 2類（95・98）：緩やかな波状口縁を有するもの。95は口頸部に平行沈線を施すが、沈線間は浅く陽部は不明瞭である。98は口唇部に粘土紐を貼り付け、口唇端がやや外側に張り出るように作出される。口頸部の沈線間は深く明瞭である。体部にはLR単節繩文が横位に施される。

・ B類（第18図99～102、図版6）：口縁内側に1条の沈線が巡り薄手のもの（99・101・102）と沈線のない厚手のもの（100）がある。99は口縁部の屈曲が弱く、緩やかに立ち上がる。口縁部は二山状の突起がつくが、単位数は不明である。口内の沈線は細く、幅も一定ではない。外面の沈線は6条であるが、上から2・3条目と3・4条目の沈線が結合し、上下の匹字文が交互に配される。沈線間は浅く、隆線部は不明瞭である。体部にはLR単節繩文が斜位方向に施文される。101は99とはほぼ同じ文様構成をしているが、口縁部は平坦で、屈曲が強く、沈線間も比較的深く明瞭である。特に匹字状の彫去は深い。文様帶は赤彩される。口唇部は外傾し、口唇直上には沈線が1条施される。102は平坦口縁で、口縁内側に1条の沈線が巡るが、深い段と化している。101・102ともに体部にLR単節繩文を横位に施す。100は器厚7mmを測り厚手である。口縁部は弱い波状をなす。頸部に2条の沈線が施される。沈線間の磨きは丁寧だが浅く、隆線部は不明瞭である。体部にはLR単節繩文が横位に施文される。

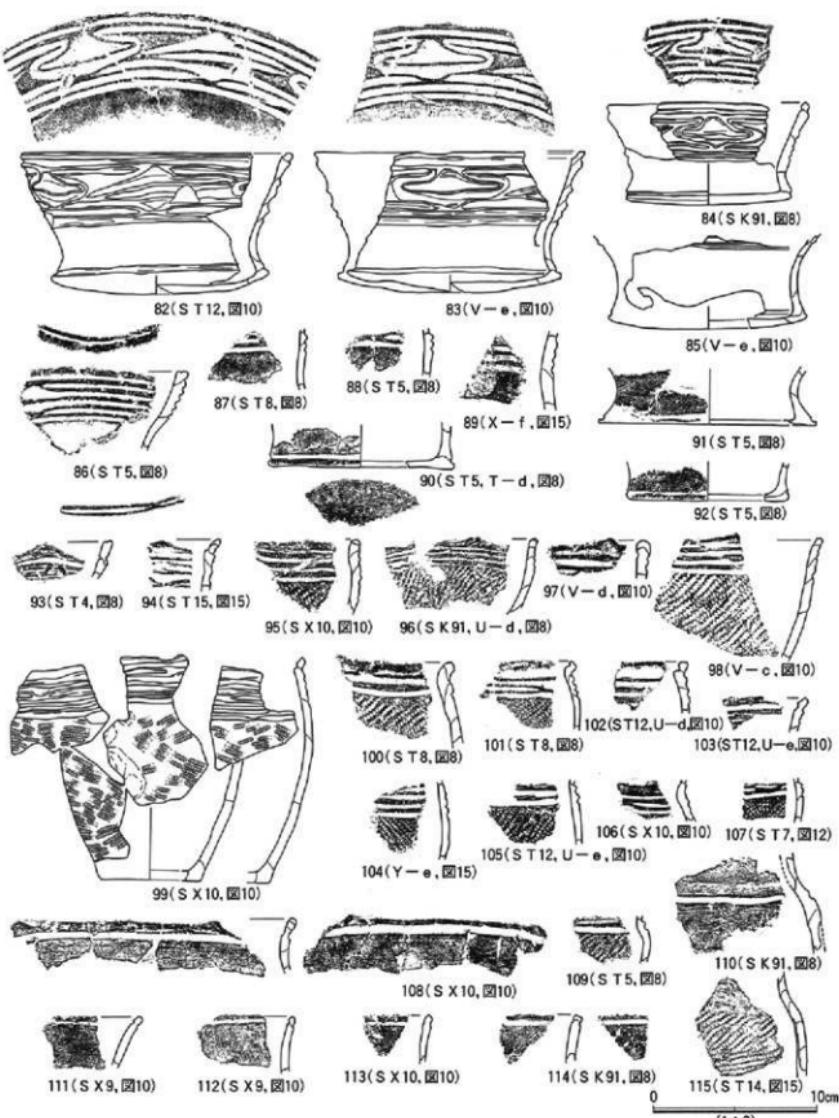
・ C類（第18図108・111～114、図版6）：無文の頸部を持ち、口縁部の内外面に1条の沈線が巡る。108は、小形の山形突起がつく。

・ D類（第19図121・122、図版3）：その他の鉢形。121は無文の小型鉢で、器高約5cmを測る。122は逆台形状の小形の鉢で、器高約6.5cmを測る。口縁部の内外面に1条の沈線が巡る。体部にはLR単節繩文を横位に施す。

(2) 鉢形の体部である。器形によりさらに細分される。

・ E類（第18図104～107・109・110・115）

E 1類（104～107・109）：鉢形B類の体部である。頸部に平行沈線が数条めぐり、口縁部で屈曲する。104が101と、105が102と同一固体と思われる。104は沈線間を赤彩される。106はほぼ口縁部に近い部分だが、焼成が良く、他と趣が異なる。



第18図 土器実測図 (3) 浅鉢・鉢形

E 2 類 (110・115)：鉢形C類の体部である。110は体部と頸部の境界に1条の沈線を持つ。沈線は棒状工具で上から押さえつけたよう、幅が一定ではなく、わずかに蛇行する。頸部無文で、体部に櫛齒条線のような細く浅い沈線が数条横位に引かれる。

(3)鉢形の底部である。平底と上底、台の付くものに大きく分けられる。

・F類 (第19図116～120)

F 1 類 (117・118・120)：平底でわずかに底部が張り出し外へ開くもの(117)と、平底でわずかに底部が張り出し鋭角に外へ開くもの(118)と、上底でわずかに底部が張り出し外へ開くもの(116・120)がある。116は底部と体部の境界に2条の沈線を持ち、底部に木葉痕をもつ。壺形の底部の可能性もある。

F 2 類 (119)：台の付くもの。体部に繩文を施す。

壺形：口頸部が体部の半分より萎縮するもの。

(1)壺形は器形が多岐にわたるため、頸部・肩部の文様のありようで2種に分類し、さら特定できないものを一括した。

A類：頸部または肩部に文様が施されるもの。

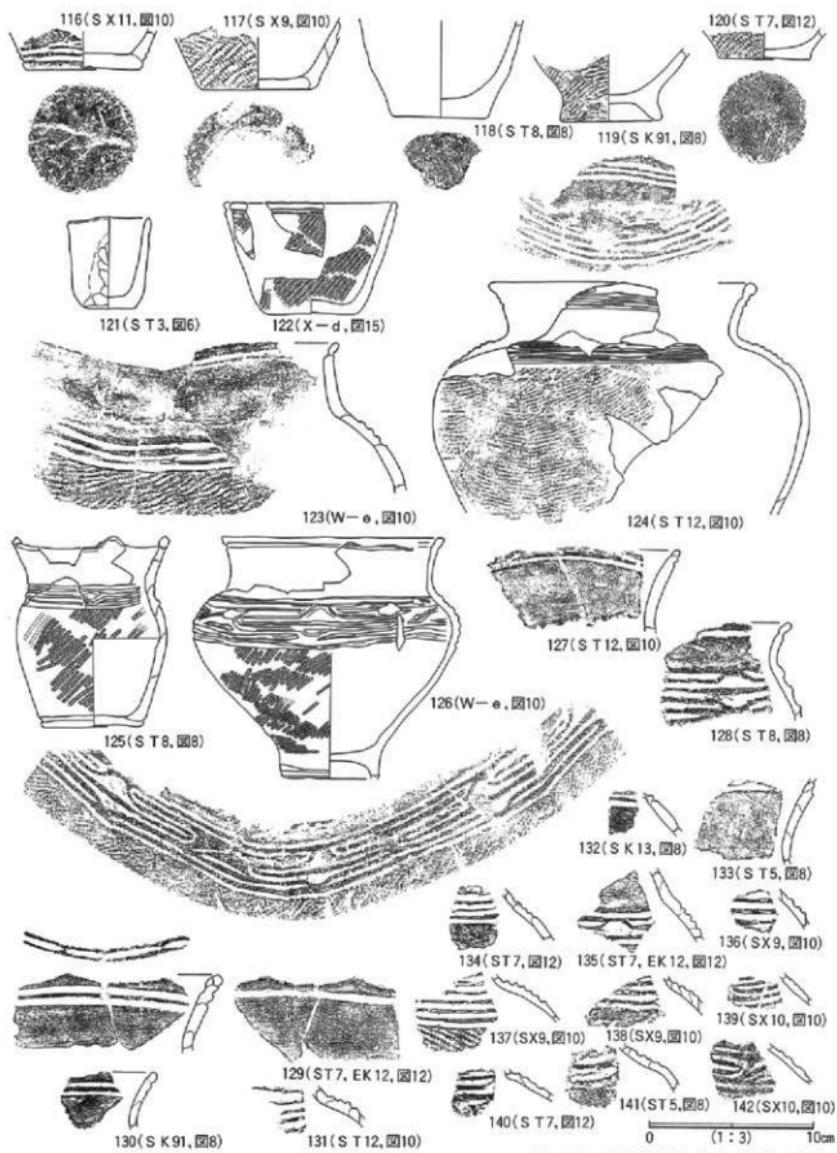
B類：口頸部が無文で、体部に繩文が施されるもの。繩文のみの粗製壺や、肩部に沈線を施しているものが含まれる。

C類：その他の壺。

・A類 (第19図123～130、図版6)

A 1 類 (123・124・125・128～130)：口頸部が磨かれ、粘土紐を口唇部に貼り付け山形突起を作出するもの。肩部が張り出し頸部が強く外傾するもの(124・128～130)と、肩部が張り出し頸部が直に立上るもの(126)と、肩が張り出さず緩やかに内弯し頸部で屈曲しそのまま緩やかに外傾しながら立ち上がるものの(125)に分けられる。124は緩やかな山形突起を有し、口唇部は外傾する。口唇直下に3条の平行沈線を有する。肩部には6条の平行沈線が巡り、中央には匹字文が見え推定6単位をなす。沈線間の磨きは荒く、幅も一定ではない。隆線部の断面形は台形のものと三角状のものがある。体部はL R 単節繩文を横位回転させる。125はS T 8の床面上からベンガラを内蔵した状態で出土した。口縁部は推定3単位の大型の山形突起が配される。頸部の屈曲は緩やかで、4条の平行沈線が巡り、匹字文が推定6単位上下交互に配される。沈線間の磨きは荒く、棒状工具の痕跡が残る。体部はL R 単節繩文を横位に押捺回転させている。128は壺形としたが、鉢形の可能性が高い。肩部が緩やかに内弯し、頸部で屈曲し外傾する。口縁部の山形突起は二山状を呈する可能性が高い。肩部に6条以上の沈線が巡る。頸部直下の隆線は粘土を削り出して作出し、頸部と区画沈線の境は不明瞭である。127以外はすべて口内に1条の沈線が巡る。

A 2 類 (123・124・127)：平坦口縁のもの。肩部が張り出し口頸部が直線的に内傾するもの(123)と、口頸部が直に立ち上がるものの(126・127)がある。123は口唇部に粘土紐を貼り付け、内外から沈線によって押さえられる。口内に1条の沈線が巡るが、幅はやや太い。口唇直下には2条の沈線が、肩部には4条の沈線が巡る。126は口頸部のはとんどが欠損するものの、ほぼ器形全体が窺える資料である。肩部で大きく屈曲して頸部からほぼ直に立ち上がる。口内には1条の沈



第19図 土器実測図(4)鉢形・壺形

線が巡る。口唇直下には1条、肩部には7条の沈線が巡る。肩部の1条目の区画沈線は頸部の粘土の削り出しにより不明瞭である。頸部には上下に対向する匹字文とそれを結ぶ斜行沈線が見えるが、部位により異なる。体部と肩部に赤彩された痕跡が見える。体上半ではL R 単節繩文が横位回転され、体下半では斜位回転される。底体部の境界には1条の沈線が巡る。

・B類（第20図165～171・177、図版7）

B1類（168・169）：山形突起を有するもの。口縁部のみでは鉢形と判別は難しい。口内に1条の沈線が巡る。169は肩部で屈曲するが、そこに沈線の痕跡が認められる。

B2類（165～167・170・171・177）：平坦口縁のもの。無文の頸部を持ち体部繩文のもの（165・166）と、口縁直下もしくは肩部に沈線を持つもの（167・170・171・177）がある。165は体部からの屈曲が緩やかで、頸部はほぼ直に立ち上がる。口唇部は上から指により押さえられ、小波状をなす。171は口唇部に粘土紐貼り付け、内外から沈線により押さえられる。口唇はやや外傾する。外面の沈線はともに赤彩の痕跡が見える。内面の沈線は比較的深い。頸部の屈曲部には段差の不明瞭な沈線が1条巡るが、これも頸部の磨きのため段差は不明瞭である。体部にはR L 単節繩文が横位の押捺回転で施される。177は口唇部直下に3条の沈線が巡り、口内にも浅い沈線が1条巡る。頸部の屈曲部にも1条の沈線が巡るが、頸部の磨きにより段差は不明瞭である。体部に附加繩文が施される。

・C類（第20図176・178・179）176は底径約5cm、器高約4cmの無文の小型壺である。S T 4・5の境界から出土した。光沢のある砂粒状の物質がいっぱいに詰まっていた。178は底部から口縁部にかけて緩やかに内弯し、口唇部が短く立つ。底径約6.5cm、器高約5.7cmの小型の壺である。口唇直下に2条、体部中位に3条、体部下半に4条の沈線が巡る。沈線間は3～4mmでやや太めで、深さは浅い。隆線部の断面形は三角状を呈す。底形は円形である。体部の四隅に太めで長さ4cm程の粘土紐が沈線を切るように縦に貼り付けられ、その両端を沈線で押さえている。頸部には1カ所直径3mmの穴が空けられている。179は口縁部が平坦で、上下を逆にしても座りがよく、台付浅鉢の台部の可能性もあるが、ここでは壺形の口縁部として図示した。極細の沈線が数条引かれる。

(2)壺形の体部は文様の有無により細分される。

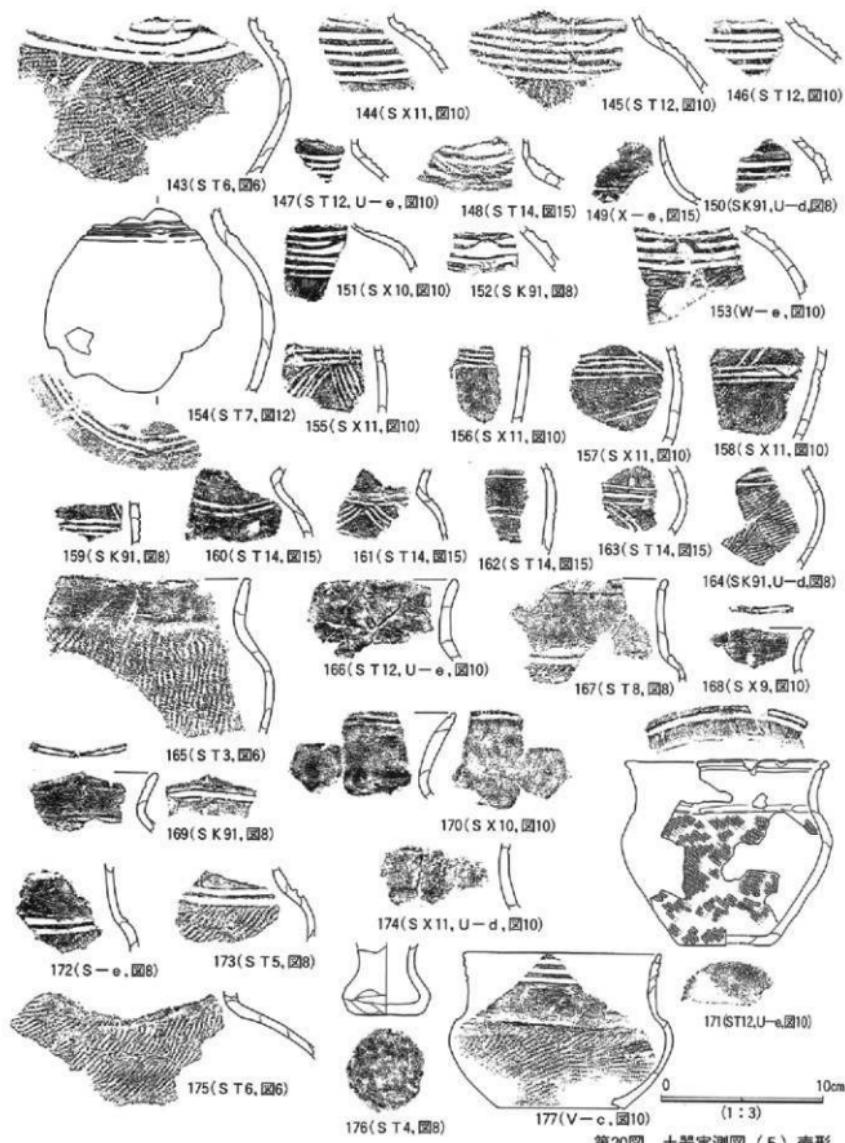
・D類（第19図131～142・第20図143～164・167～173・175・第21図180・181）

D1類（131～153）：すべて平行沈線を肩部に持ち、匹字文を描くもの（135・140・143・145・151～154）と、変形匹字文の斜行沈線部（142）、矢羽状に似た文様を持つもの（148）がある。143は、沈線間が深く明瞭だが、隆線部の断面形が三角状を呈し、浮線的である。154は器厚がやや厚く体部無文で、沈線も浅いが、赤彩される。

D2類（155～164）：平行沈線を有し、さらに縱に垂下する平行沈線を有する。164以外はすべて体部無文である。隆線手法の土器とは明らかに異なり、沈線は細く、浅い。時間差の存在も考えられるが、出土地点は隆線手法の土器と近接している。判断は今後の資料の増加を待ちたい。

D3類（172・173・175）：頸部無文、体部繩文の壺形で、頸部に平行沈線が巡るもの。

D4類（181・181）：小形の壺形で、体部下半付近から屈曲の認められるもの。



第20図 土器実測図（5）壺形

深鉢形土器

(1) 深鉢形土器は、口縁部から頸部の形状から大きく3種類に分けられ、それぞれ口唇等の状態からさらに細分される。

A類：頸部にくびれを有し口唇近くで外反する。いずれも口縁部から頸部にかけて無文帯をもつように調整を施している。外傾の状態から4種に類別される。

B類：口縁部から頸部にかけて丸味をもって大きく外側に屈曲する。A類と同様口唇直下から頸部まで無文帯を形成する。屈曲の状態から2種に分類される。

C類：口縁部が内寄するもの。口頸部の形状から2種に区分される。

- ・ A類（第21・22・23図182～210・247、図版8）

A1類（184・185・186・190・192・193）：頸部がやや直立し口唇が外反する。口唇が平縁になるもの（185・188・193）、細い粘土紐を貼り付け指で細かい山形文を作出し小波状口縁となるもの（184・192）とがある。恐らく体部の上半から中半にかけて最大の膨らみもつとみられる。184～186はLRの単節斜縄文を、192・193はLRの単節斜縄文を斜位に施す。190は附加条文である。188は頸部付近でLRの縄文を縱方向に施文後に横方向に押捺回転している。

A2類（198・205・208・209）：口縁部から頸部にかけて外反し、口唇が平滑な平縁を呈する。口唇直下から強い指ナデにより無文調整を図り頸部がやや屈曲する。口唇直下付近が最大径となるとみられる。198は口唇端がやや張りだすように作出され外反し、209は幅広い指ナデによる無文調整を施している。205・208は頸部付近にLR単節斜縄文を横位に押捺回転している。

A3類（191・195・197・199～206・210・247）：口縁部から頸部にかけて大きく外反する。口唇端には、A1類と同様の手法で山形文を作出し小波状口縁となっている。体部上半から下半にかけて膨らみを持つとみられる。194・195・197はA3類の特徴をよく示す。194・195・197・204・207はLR単節斜縄文を横位方向に施す。247は体部上半に流水文や匹字文が描出されている。

A4類（182・183・187・210）：頸部がやや直立し口唇端が大きく外反し、強い指ナデにより口唇端から頸部まで作りだしている。器形は頸部付近から体部中下半にかけて丸味を持つようになり膨らみを示す。210は特に頸部で強い指ナデの無文調整が顕著に行われている。187は無文調整を幅広に施している。縄文施文は、210でLR単節斜縄文を横方向に、203は口縁部斜位方向で、182では附加条文を斜位方向にそれぞれ押捺回転している。

- ・ B類（第21・22・23図189・196・211～230 図版8）

B1類（189・196・211・212・218～220・223～226・230）：口縁から頸部にかけて丸味が強く外反し、頸部の無文調整を幅広に施している。体部中半に最大径を有する。口唇が平滑になる189・212・223・226と丸味のある196・218・220等がある。230は口径24.8・器高42.9・底径11.8cmを測り、口唇が平滑で体部中半に膨らみを有し、底辺付近がほぼ垂直に立ちあがり、口径に比べ底径がやや小さい上底となる。全面に器面上方からクシ描による条痕が施されている。

B2類（213～217・221・222・229～229）：頸部でやや直立し口唇付近から外反・屈曲する。215・217・227は口唇がやや肥厚し端部が外反し張りだし、213・216は口唇が丸味を有し、口唇端が指ナデにより大きく外反するもの（215・222・229）等がある。229は口径21.8・器高21.9・底

径5.80cmを測る。全面に器面上方から模描による条痕が施されている。底辺付近が研磨調整され、上底である。器形は壺に近似する。底部は丁寧に調整されているため痕跡は不明である。

・C 類 (第23図231~246、図版9)

C 1 類 (238)：底部から内弯して立ち上り、体部上半から口縁にかけ大きくさらに内弯する。

C 2 類 (231~234・243・245)：口縁から頸部にかけて丸味を有し口唇で内弯する。口縁に無文の調整がみられず口唇直下からL R 単節斜縄文を横位方向に施すもの(231・234)と無文調整になるもの(232・233)がある。243は模描条痕を施文。233は異方向にL R 縄文が施される。

C 3 類 (235~237・239~242・244・246)：C 2 類と同様な器形を呈するが、口縁から頸部がやや直立し口唇で内弯する。235はL R 縄文を施し、それ以外は模描による条痕が施文される。

(2) 体部は地文の構成から斜縄文・附加条文・絡条体撚糸文・条痕文の4種類に分けられる。

・D 類 (第24図248~270・第26図301~330)

D 1 類 (248~252)：いずれも斜縄文が地文の体部中・下半の土器。248は体部中半でL R 単節縄文を規則的に横方向に、その他は体部下半部でL R 単節縄文を斜位方向にそれぞれ施す。

D 2 類 (253~270)：附加条文を施す体部中・下半の土器。その大半が附加条文は1本であり、257は2本の撚糸が加えられている。いずれも斜位方向に施している。

D 3 類 (324~330)：単軸絡条体1 A 類 (撚糸文) を施文している。1段無節R条を右巻きにしたものである。

D 4 類 (301~320)：口縁部あるいは体部上半から底部までクシ描による条痕が施文されている。307は底部に木葉痕がみられやや上底で底径がわりあい小さい。

(3) 深鉢形土器の底部は平底と上底に区分。上底はその作出によって5種類に分類できる。

・E 類 (第25図271~300)

E 1 類 (293)：平底を呈し、底部から内弯するように立ち上がる。恐らく壺形の底部である。

E 2 類 (275・285)：上底になり、底辺部で張りだすように屈曲・外反し体部下半から内弯する。底辺は地文L R 単節斜縄文を施し丁寧な調整で磨いている。

E 3 類 (271・273・274・278・280・283・286 288・291・292・294・295・298・300)：上底である。底部から底辺ではほぼ垂直になり外反しながら立ち上がる。273は木葉痕、295は撚糸文を底部に施文する。291外は底部を研磨している。底辺は丁寧な調整で磨いている。

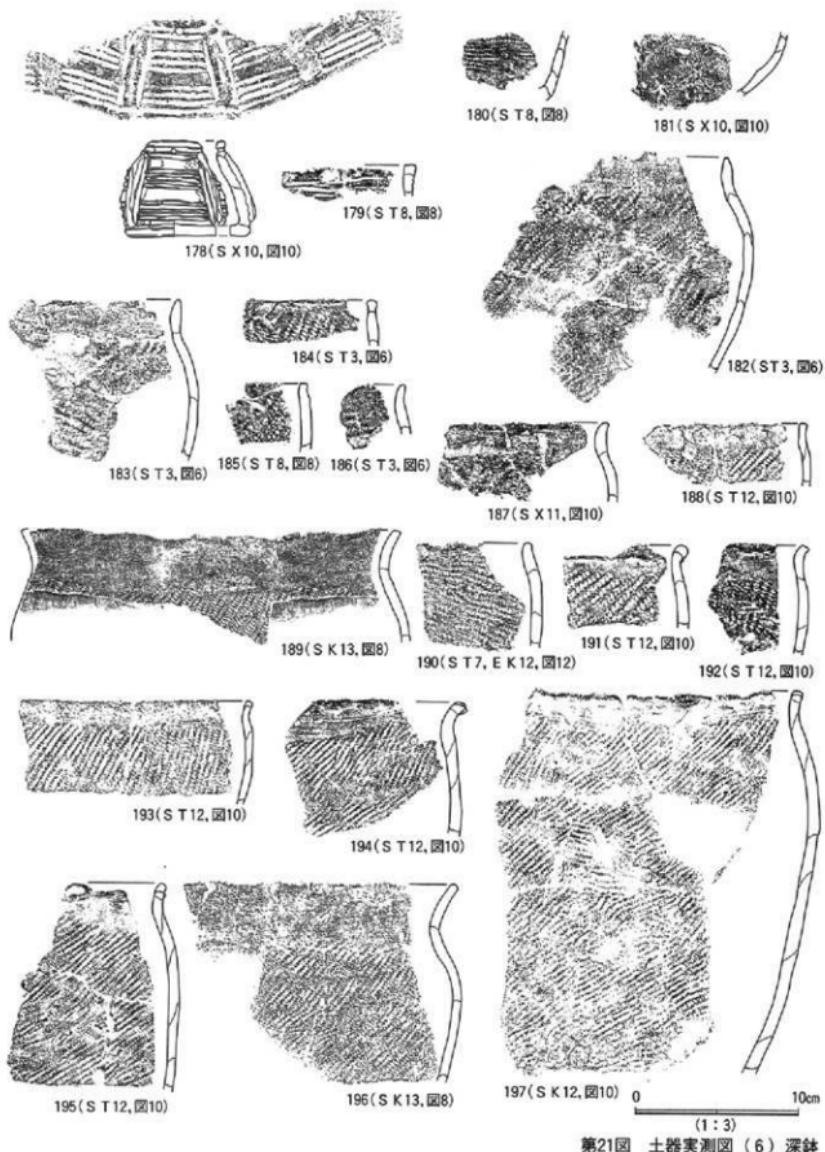
E 4 類 (276・282・285・289・290・296・297・299)：上底になる。E 3 類と同様な形状を呈するが、底部から底辺にかけて丸味を有するのが特徴である。底辺部の無文調整の幅が広い。

E 5 類 (272・277・279)：底部の外縁付近を調整して溝状になる上底を呈し、底辺から外傾するよう立ちあがる。230・277は中でも顯著な形状を示している。297はやや内弯する。

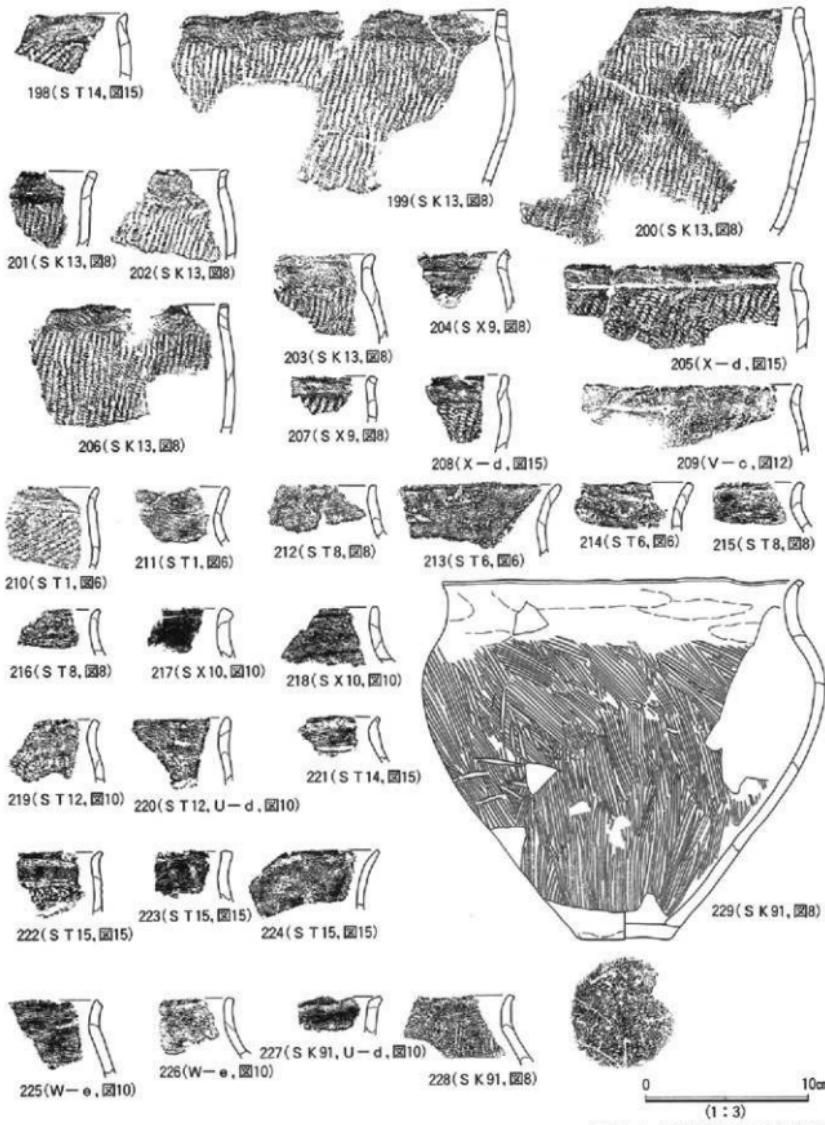
E 6 類 (281)：上底を呈す。底辺部で外反し、体部下半から内弯して立ち上る。壺形になる。

弥生土器 (第26図331 図版9)：平行沈線による同心円文を施文する。後期の桜井式に比定。

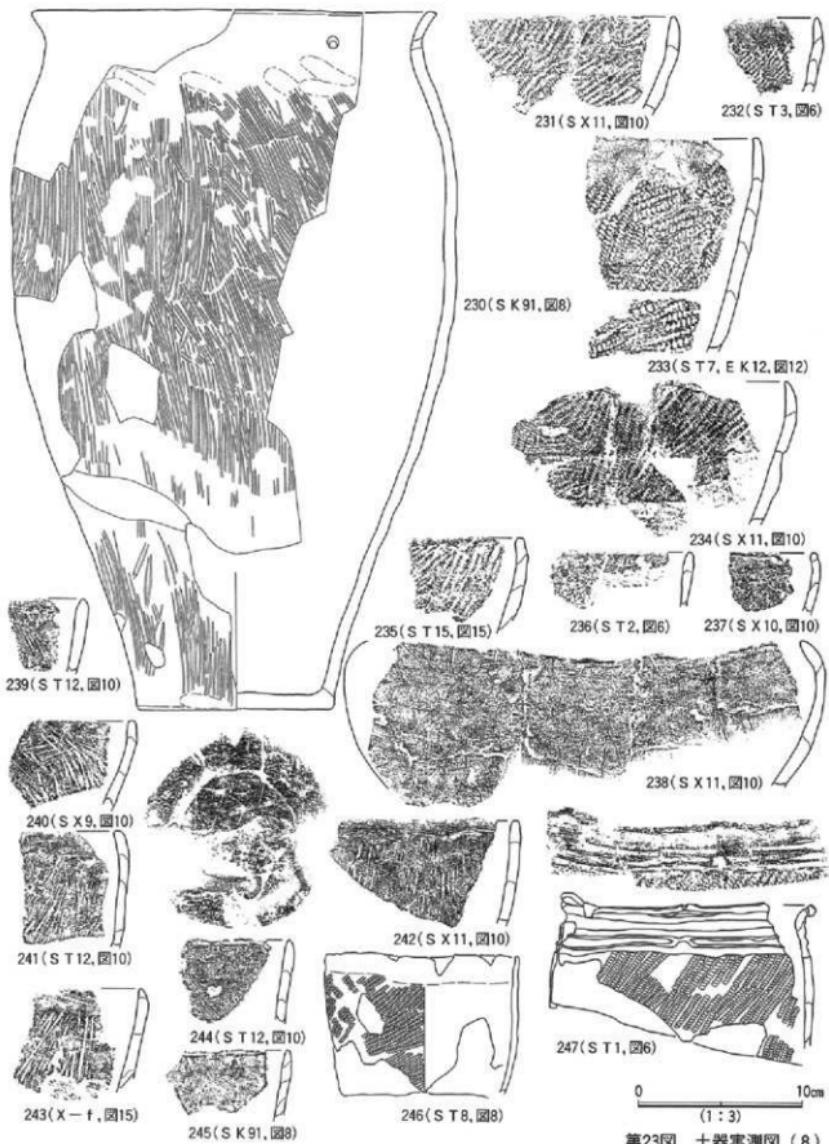
土 筋 器 (第26図332~334)：332は小型壺平底を呈し、頸部にハケ・体部には丁寧なナテ調整が施され、内面はケズリとナテ調整がある。333・334は壺で、333は頸部から外反し、334で頸部が直立して外反、いずれも体部ケズリで内外面に丁寧なナテ調整を施す。



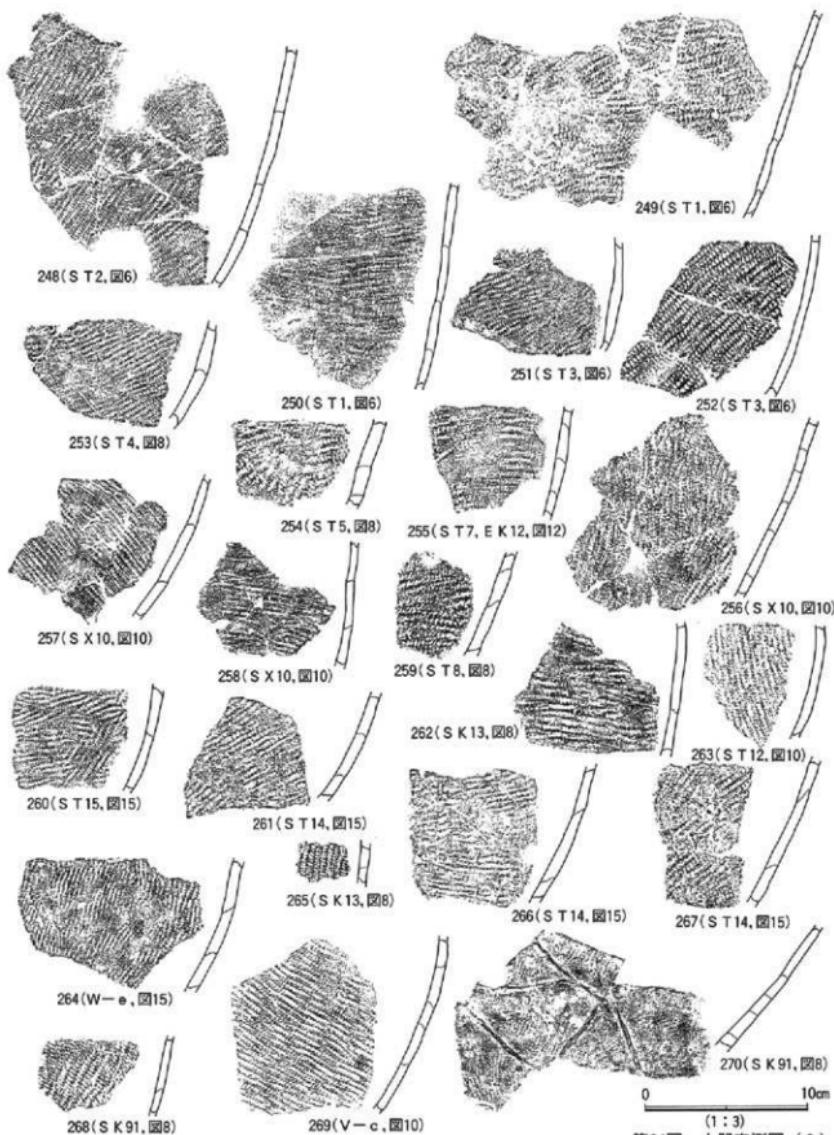
第21図 土器実測図（6）深鉢



第22図 土器実測図 (7) 深鉢

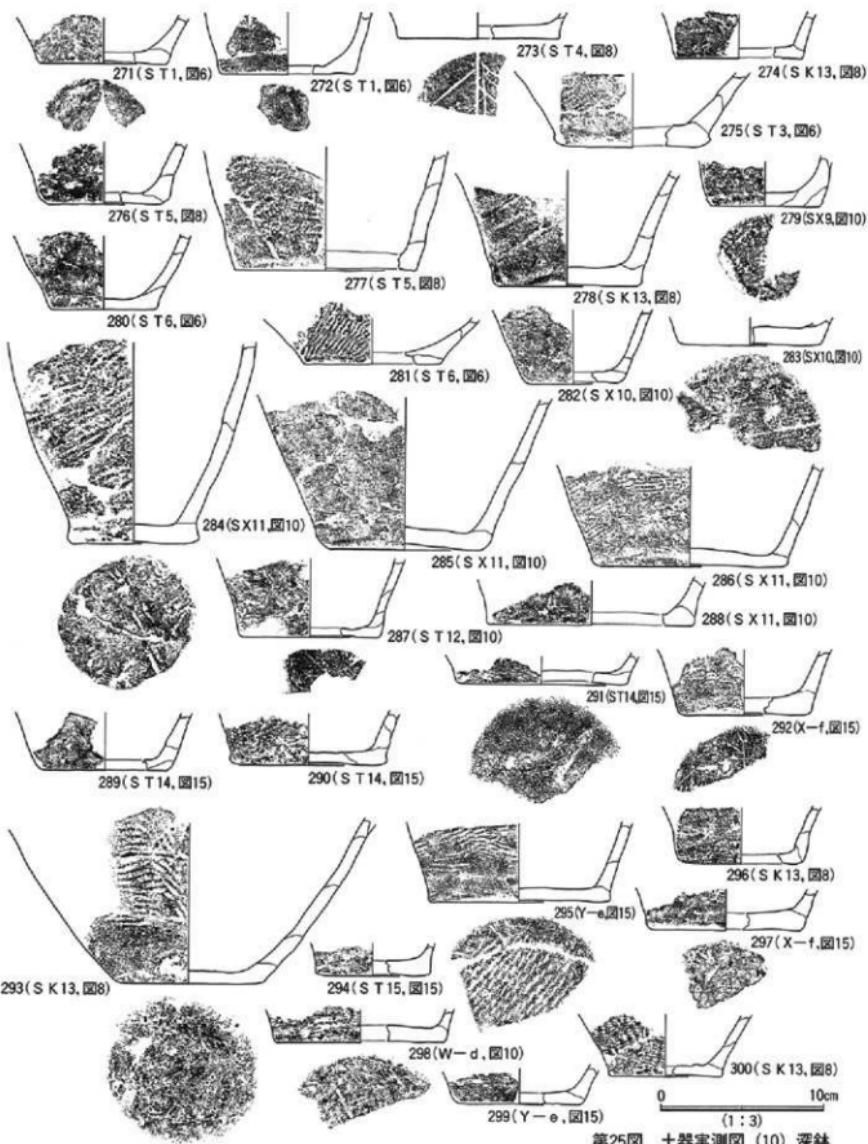


第23図 土器実測図 (8)

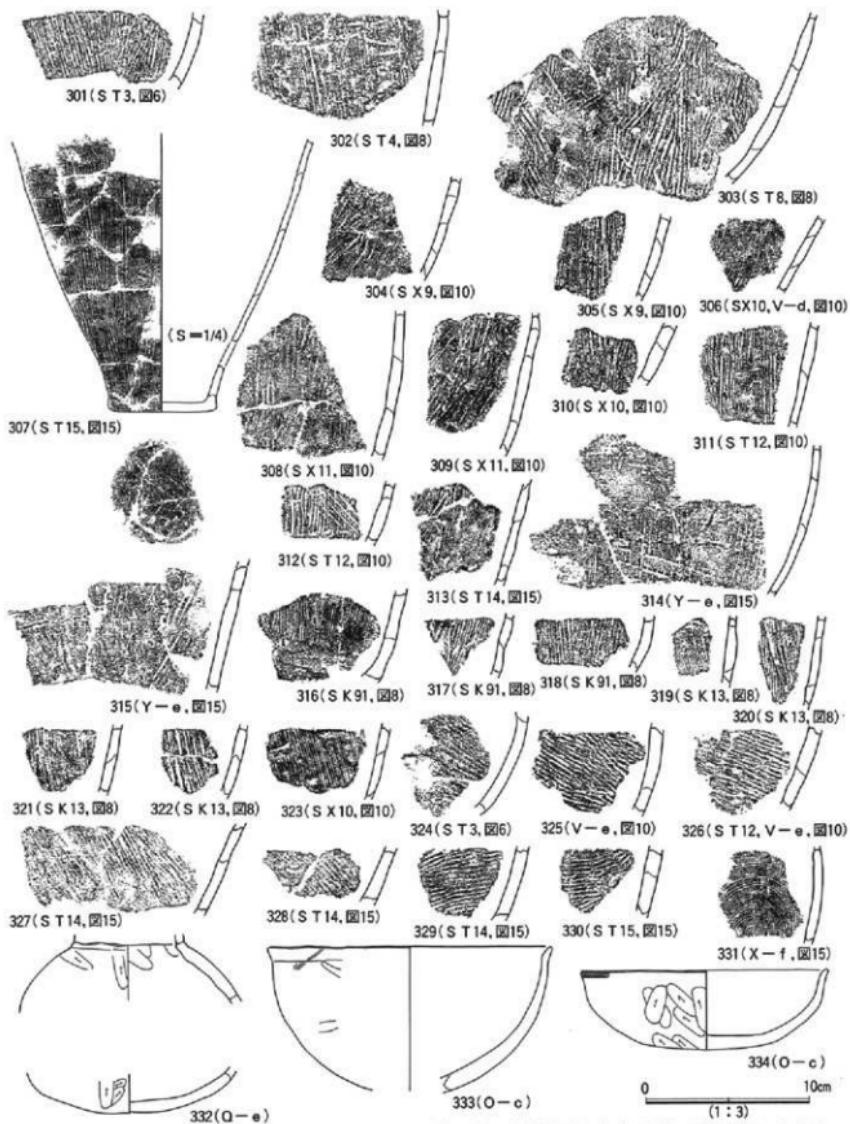


第24図 土器実測図 (9)

出土した遺物



第25図 土器実測図 (10) 深鉢



第26図 土器実測図 (11) 深鉢・弥生土器・土師器

2 石器・石製品（第27・28 図335～363 図版10）

石 鎌（335～339）

5点出土し、いずれも有茎を呈し基部の形状から4種に分けられる。335・336は基部が突出するもので、中央のみねが肥厚し側縁の調整は不明瞭である。337・338は基部がほぼ直線的になり、側縁が細かい丁寧な交互剥離調整がなされ、中央のみねがやや高くなっている。いずれも基部と先端が欠損している。339は基部に多少の抉り入るのが特徴で、形が長身の二等辺三角形を示している。

石 匙（344）

1点出土する。両縁上部をやや浅いノッチを入れてつまみを作出している。片面の側縁に加工があり、形からみて縱形を呈す。長さ64mm・幅50mm・重さ37.77gを測り、頁岩である。

笠状石器（341・342）

2点出土し、いずれも縱形を呈する形態である。341・342とも基部付近の側縁は大きく抉り入るように両面調整加工され、先端部でも両面の調整がなされている。341は磨面を調整加工していることから、恐らく磨製石斧の先端部を再利用して作出す。大きさ341長さ70mm・幅42mm・重さ48.37g、342長さ70mm・幅41mm・重さ43.77gを測る。

削 器（340・343・345）

3点出土。剥片の縁辺に調整や加工して刃部を作出し、3点とも片面の側縁を加工している。340は、縁辺と先端の2方向から片面の加工調整を施し、形状が梢円を呈している。343は片面の両側縁を調整し、先端部の加工調整はみられない。345は先端部のみ調整を施し、不定形である。大きさは340で長さ56mm・幅33mm・重さ18.36g、343で長さ57mm・幅37mm・重さ20.10g、345では長さ71mm・幅70mm・重さ84.90gをそれぞれ測る。石材はいずれも頁岩である。

磨製石斧（346・347）

いずれも刃部のみで基部は欠損する。346は刃部は使用されたため刃部が丸味があり両刃となって、多少の使用痕がみられる。347は片面が使用時に欠損したとみられる。大きさは346で長さ69mm・幅34mm・重さ145.2g、346で長さ84mm・幅47mm・重さ141.9gを測る。

独鋸石（348）

1点のみ出土。全体に丁寧に研磨調整されており、中央の2つの刃も鋭角的に磨がかれ、両端は刃部の両刃に似たような加工を示す。最長132mm・最大幅51mm・厚さ20～24mm・重さ194.7g。

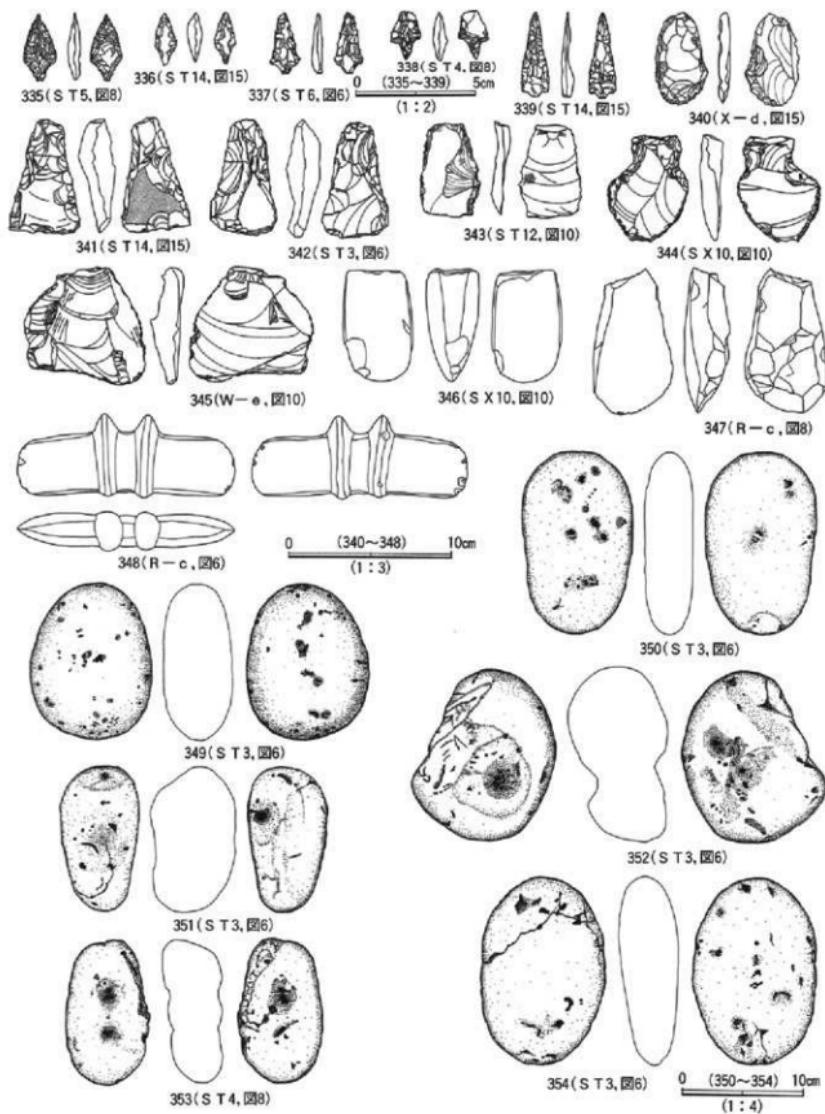
磨 石（349・350・354・361）

両面磨りで梢円になる349・350・354と片面磨りで円の361の2種類がある。大きさが梢円形のものは長さ117～155mm・厚さ5cm前後・重さ850g前後、円形のものは重さ990gを測る。

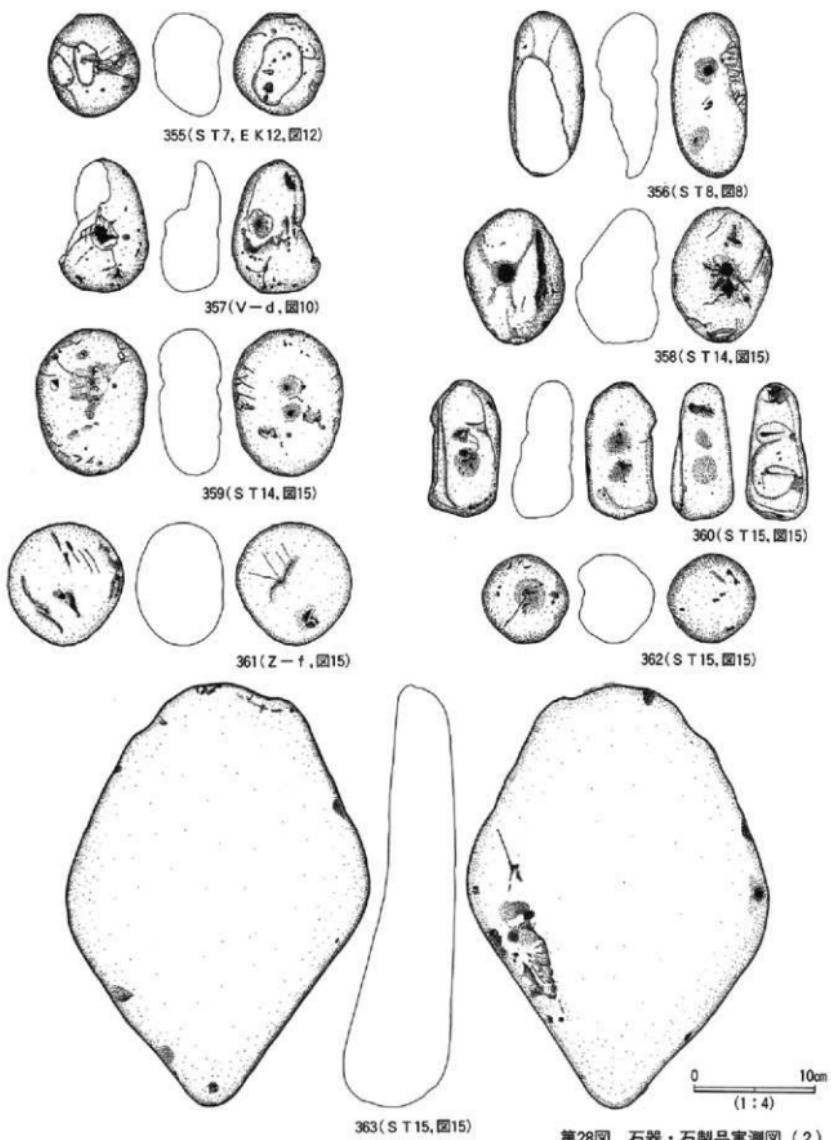
凹 石（351～353・355～360・362）

形状は円形と梢円形の2種類にわけられる。磨石を転用したものが362・359・353である。凹の数は、1：0が351・355・356・362、1：1で352・357、1：2で358・359、2：2で353、4面に2個あるものが360である。大きさは、長さ74～150mm・重さ460～1234gを測る。

	長さ (mm)	幅 (mm)	重さ (g)
335	33	27	1.24
336	22	0.9	0.99
337	(26)	12	0.93
338	(21)	12	0.96
339	35	11	1.22



第27図 石器・石製品実測図 (1)



第28図 石器・石製品実測図 (2)

VII まとめ

今回の調査の成果を以下に列挙する。

1. 縄文時代終末期の竪穴住居跡が11棟、竪穴状遺構が3棟、大型の土壙が2基検出された。竪穴住居の炉跡は石組みなどの施設を持たない地床炉であった。また住居施設として土壙を伴う住居跡が3棟確認できた。柱穴は主柱穴を伴うものと、側柱穴のみで壁立ちの住居跡の二つがあったと思われる。当該期の竪穴住居跡は、山形県はもちろん東北でも検出例が少なく、竪穴住居の構造を知る上で貴重な資料といえる。
2. 住居跡、土壙などの遺構から出土した土器は、縄文時代晚期終末期の大洞A式新段階から大洞A'式古段階の土器が大部分である。器形は浅鉢・台付浅鉢・鉢・深鉢からなり、この時期としてはまとまりのある良好な資料である。
3. 文様については、精製土器のほとんどが5条から7条の平行沈線を口頸部に持つ。その多くが匹字文を施文する。また匹字文とそれをつなぐ斜行沈線からなる変形匹字文も見られ、この土器群が大洞A式にしろ大洞A'式にしろ一つの時期を画することは明らかである。また土器の文様の施文方法はほとんどが隆線手法によるもので、沈線間は深くよく磨かれており、幅も一定である。これに対して沈線手法による文様を持つ土器(第20図155~164)は例外的であった。ただし、沈線手法による土器も、出土位置は隆線手法を持つ土器と近接しており、同時期の所産とすることも可能である。これに関しては第17図66の台付浅鉢の存在も一考を要する問題と考える。
4. 深鉢形の粗製土器はほぼすべての遺構から条痕文を持つものが出土している。特に、第23図230は条痕文を持つ深鉢で、ほぼ器形全体が窺えるが、体部下半が底部から垂直に立上る器形で、このような器形の粗製深鉢は山形県内では見つかっていない。同じく条痕文を持つ第22図229は、深鉢形に分類したが、甕と呼んでかまわない器形を呈している。こうした条痕文を持つ深鉢形の土器は、東北では福島を中心に多く見られ、浮線網状文土器に伴出する土器である。また深鉢形の体部資料で撫糸文を施文する一群も見られる。精製土器で浮線網状文の施文されるものは確認できなかったが、粗製土器ではこの時期になると南からの影響が村山盆地まで達していたことを知ることができる。
5. 今回の調査では光沢のある砂粒状の鉱物を貯蔵した土器(第20図176)と内部にベンガラと思われる赤色顔料を貯蔵した土器(第19図125)が出土した。この2点について鉱物分析、螢光X線分析を行ったので、その結果を簡略に述べる。176内試料については鉱物分析の結果、99.2%を赤鉄鉱の一種である鏡鉄鉱が占めることが明らかになった。選択的に鏡鉄鉱が集められ土器中に保存された可能性が高い。また125内試料の螢光X線分析の結果、鉄の含量が高く、ベンガラと考えられる。176内試料の砂粒子が赤鉄鉱の一種である鏡鉄鉱と同定されていることから、この赤鉄鉱(鏡鉄鉱)がベンガラの原料となった可能性も考えられる。176内試料の類例としては、新潟県新発田市の丸山B遺跡の資料が知られるが例は少ない(田中耕作「縄文時代における鉄鉱石の利用」『北越考古』第7号北越考古学研究会 1996)。

報告書抄録

ふりがな	きたやなぎ 1いせきだい 2じはくつちょうさほうこくしょ								
書名	北柳1遺跡第2次発掘調査報告書								
副書名									
卷次									
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書								
シリーズ番号	第76集								
編著者名	森谷昌央 佐藤正俊 稲村圭一								
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター								
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301								
発行年月日	2000年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
きたやなぎ 1いせき 北柳1遺跡	やまとがたけん 山形県 やまがたし 山形市 おおむちあひや 大字青柳 あざきたちや 字北柳	市町村	遺跡番号	6201	平成7年度登録 17分 46秒	38度 20分 59秒	140度 ~ 19991027	1,500	山形県立 中央病院 改築整備 事業
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項		
集落跡	縄文時代 (晩期終末)	竪穴住居	11	縄文土器			縄文時代終末期の竪穴住跡が多数検出された。		
		竪穴状遺構	3	石器					
		土壙	2	石製品(独鉛石)					
	弥生時代 (中期)			弥生土器					
集落跡	古墳時代 (中期)	竪穴住居	1	土師器			(総出土箱数:35)		

図 版



遺跡近景（東から）



竪穴住居群（南から）

図版 2



遺跡全景（南から）



S T 1・2・3 完掘状況（西から）



S T 4 完掘状況（西から）



S T 8 完掘状況（南西から）



S T 群完掘状況（西から）



S T 1～8 遺物出土状況（南から）



S T 14 遺物出土状況（南から）



浅鉢・第16図 5(1/3)



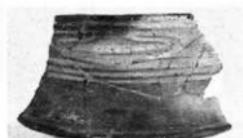
台付浅鉢・第17図 66(1/3)



浅鉢・第17図 60(1/3)



浅鉢・第17図 81(1/3)



浅鉢・第18図 83(1/3)



壺・第20図 176(1/3)



壺・第21図 178(1/3)



鉢・第19図 121(1/3)



鉢・第19図 122(1/3)



壺・第19図 126(1/3)

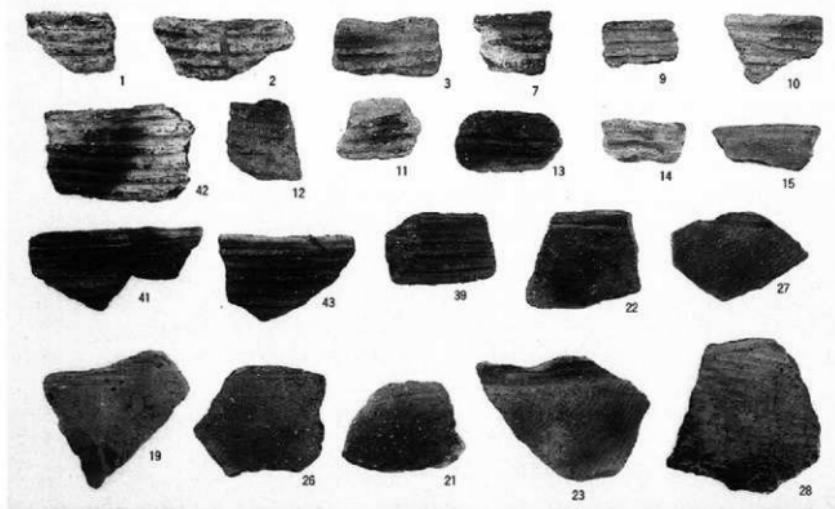


深鉢・第22図 229(1/4)



深鉢・第23図 230(1/4)

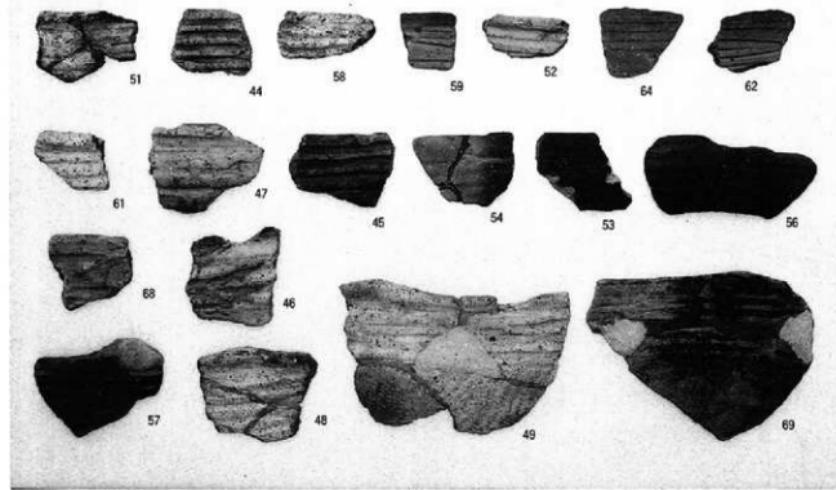
圖版 4



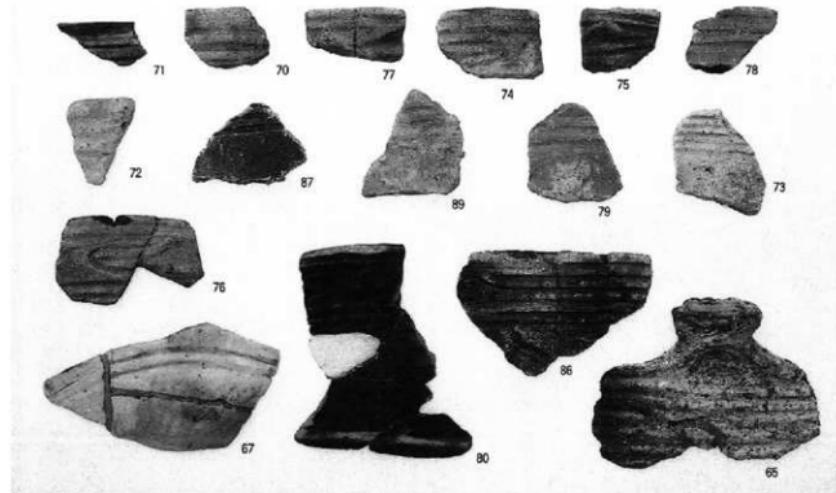
土器 (1) • 1/2



土器 (2) • 1/2

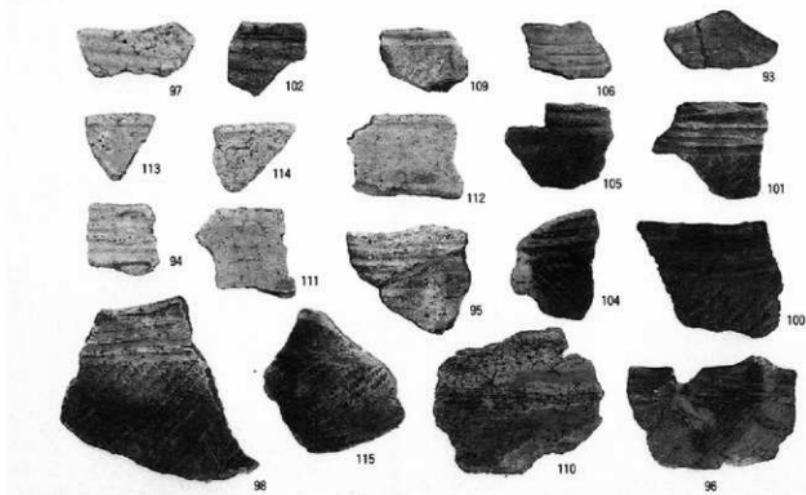


土器 (3) · 1/2

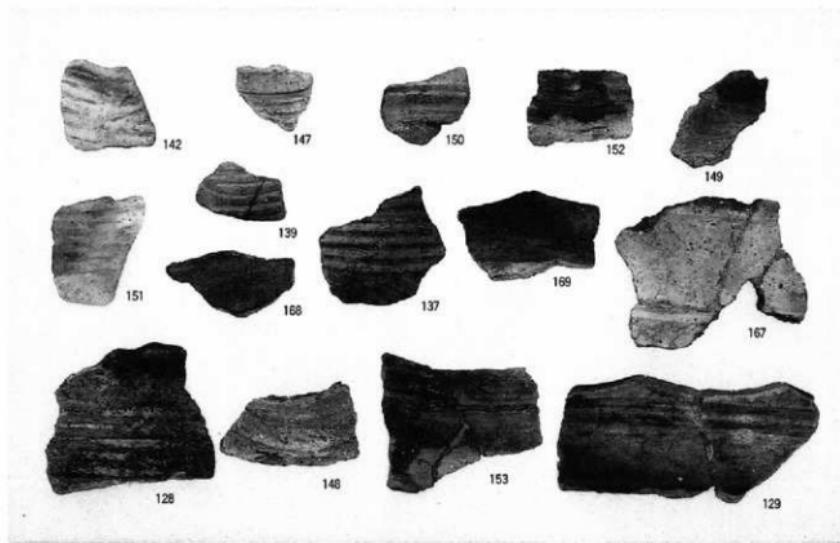


土器 (4) · 1/2

图版 6

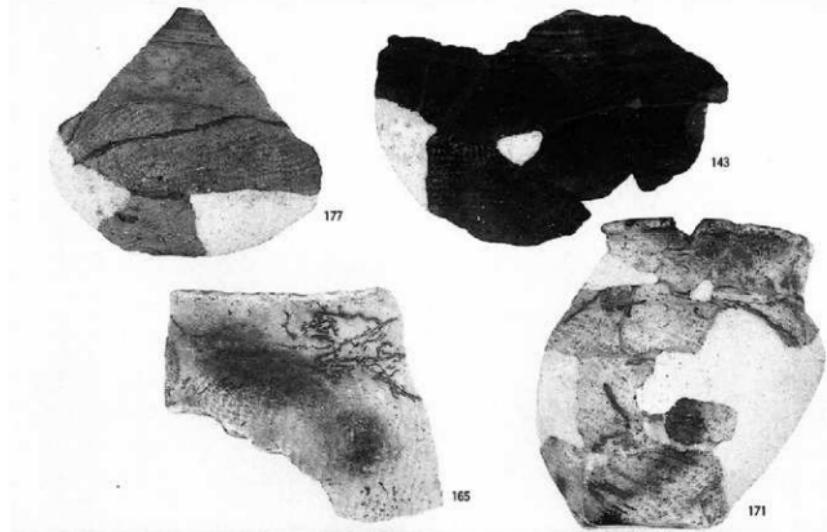


土器 (5) • 1 / 2

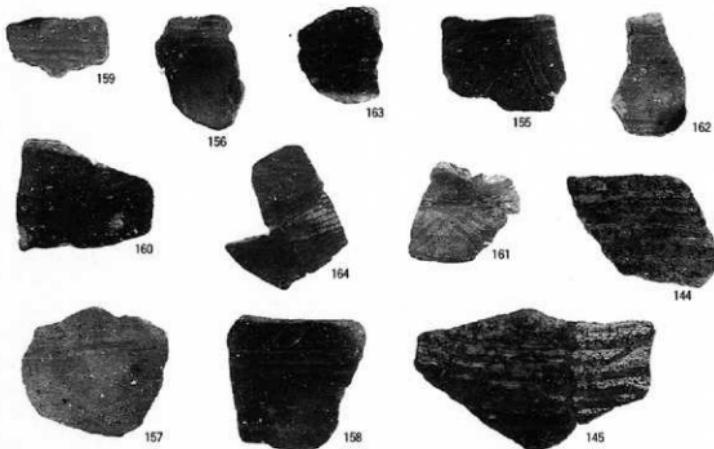


土器 (6) • 1 / 2

図版 7

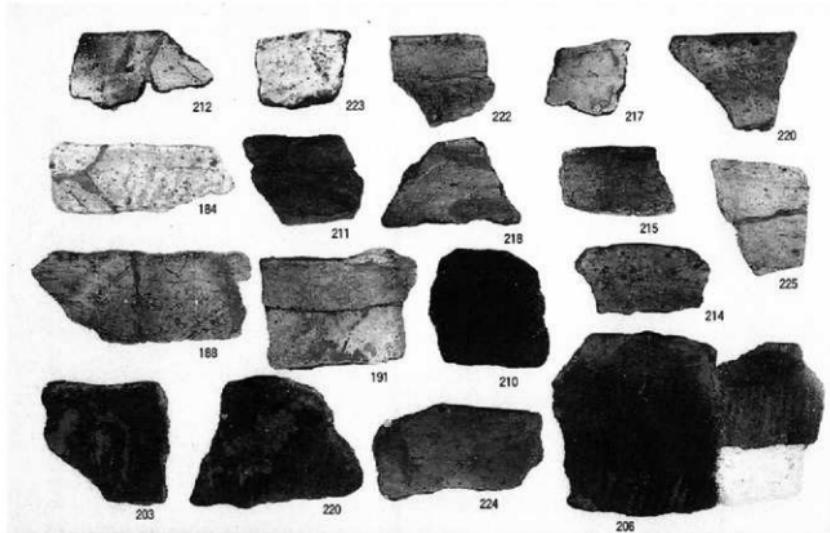


土器 (7) • 1/2

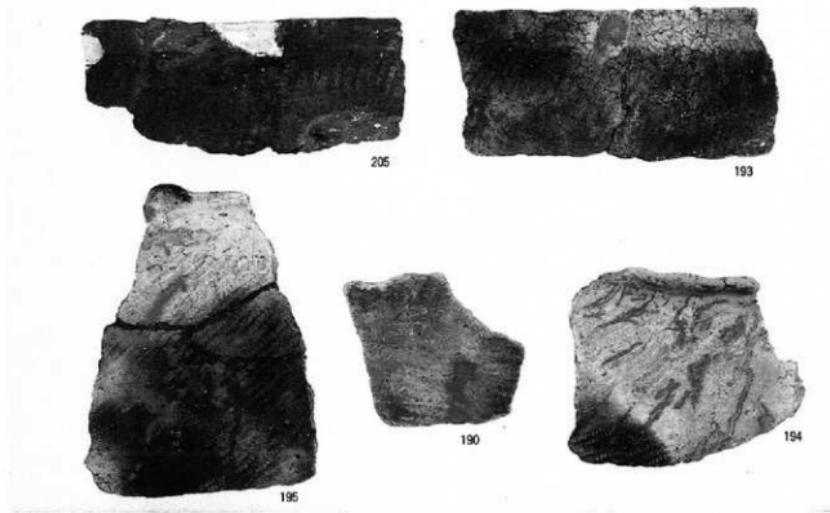


土器 (8) • 1/2

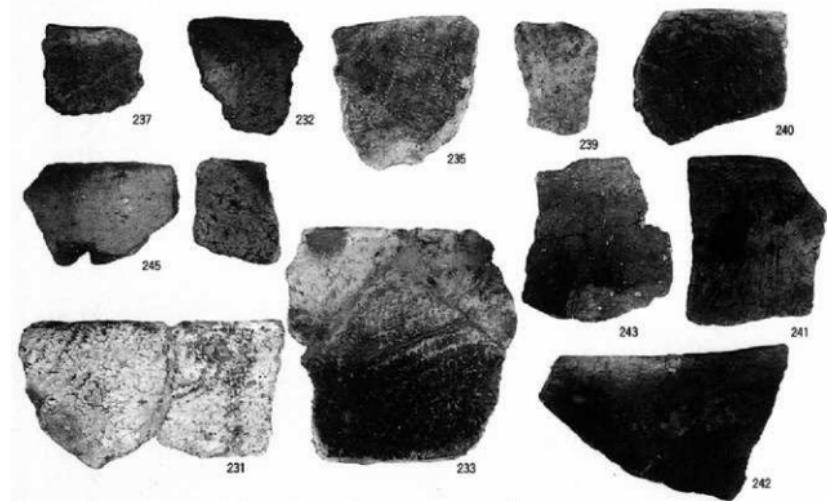
圖版 8



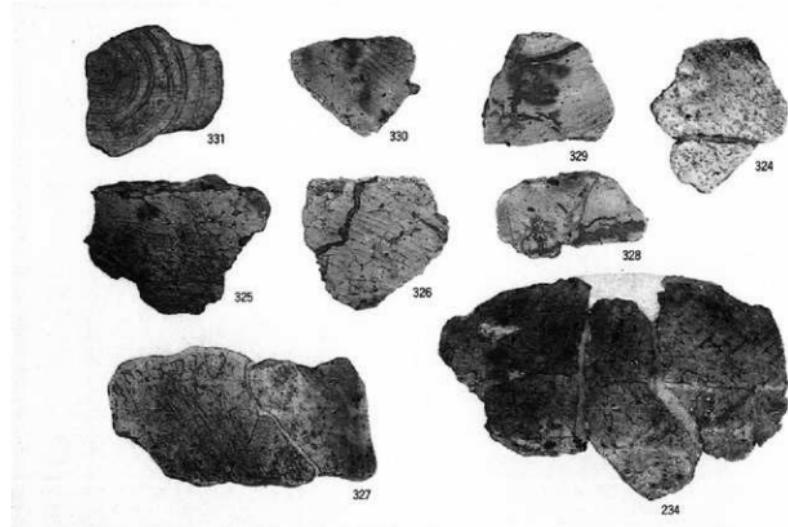
土器 (9) • 1 / 2



土器 (10) • 1 / 2

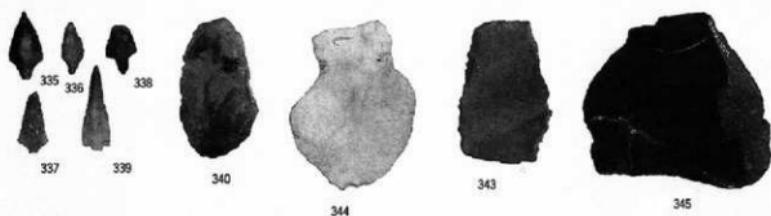


土器 (11) • 1 / 2

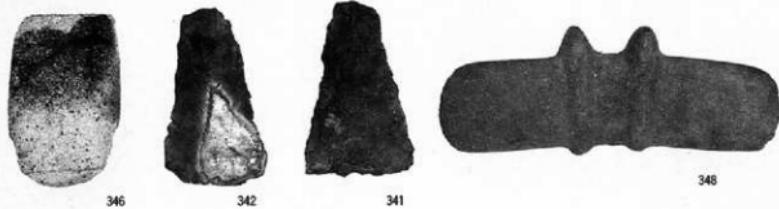


土器 (12) • 1 / 2

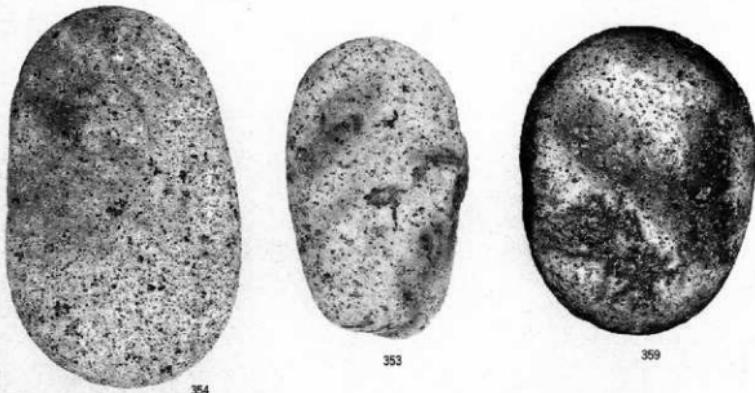
図版10



石器・石製品 (1)・1/2



石器・石製品 (2)・1/2



石器・石製品 (3)・1/2

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第76集

あた やなぎ
北 柳 1 遺 跡
第2次発掘調査報告書

2000年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3127 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 山形印刷株式会社
